

金沢大学 暁烏文庫蔵

暁 烏 敏 宛

宮沢政次郎書簡集

編注・栗 原 敦

は し が き

ここに翻刻した書簡は、宮沢賢治の父、宮沢政次郎が、暁烏敏に宛てた封書三十七通と葉書二十四葉（「浩々洞御在洞各位」宛一葉を含む）である。時期は明治三十九年より昭和三年におよぶ。今仮りに「宮沢賢治周辺資料」と冠したが、「暁烏敏関係資料」と呼ぶことも出来る。浄土真宗における精神主義運動の中心であった暁烏敏に宛てられたものだけに、個人の信仰の内面に関るところも多い書簡で、扱いにも配慮が要された。政次郎翁のご子息、宮沢清六氏にご一覽いただき、公表のお許しをお願いしたところ、出来れば遠慮もしたいところだが、発表することで「益になり、多少なりとも若い人たちのおやぐに立つとお考へならば」ということでご了承をいただ

くことができたので、ここに紹介する次第である。

だれも、自ら出会ったあらゆるもの、すべてのひとから学び、育てられるものであり、宮沢賢治とて例外ではないが、これらの書簡を読む時、そういった一般性をこえて、宮沢賢治というひとつの存在が、まさに親子二代の産物に他ならぬ、という思いを禁じえない。これら書簡をふまえていささか論じたいことも生れてはいるが、今はただ、ご覽いただく方のうちに「あれはさうですね」というような思いの浮かぶ箇所もあることを信じて、本書簡集をお示し出来ることで幸せである。

縁あって金沢に住いすることになったある日、書店で偶然『暁烏敏日記』を手にした。当地の地方出版物で会員頒布なのであった。かつて、宮沢賢治の父、宮沢政次

郎の精神主義運動とのむすびつきを想定したことがあった。その折、旧版の『暁烏敏全集』のごく一部分を見はしたのだが、それなりで深くは追究しないままであった。日記の頁を繰るに従い、宮沢政次郎やその縁者たちの名が頻出するのに、いたく驚かされた。早速『精神界』などの調査をはじめ、かたわら、同日記の編集に携わったお一人である松田章一氏に来信保存の有無などをお尋ねし、複写の便をはかっていただいた。それがこの翻刻につながったのである。この場をかりて、お世話いただいた松田氏にお礼を申し上げたい。

また、見苦しい原稿を突然送りつけるという失礼にもかかわらず、お忙しい中をご覧下さり、様々ご注意ください、公表のお許しを与えられた宮沢清六氏に、改めてここでお礼申し上げます。

何分浅学のうえ、毛筆の手紙を読むという慣れない仕事であったので、不十分なところも多々残されている。注は、公刊物であっても一般の読者の目に触れにくいものからは煩をいとわず引用する、という方針をとったが、疎密適切を欠くところも多いと思われる。後日の補訂を期するばかりである。

一九八〇年十一月

注記

- ・整理番号は年月順による通し番号。
- ・日付は本人記載のもの。
- ・字空き、行変えは編者が判断した。
- ・漢字は現在通行のものに、変体がな及び合字は標準形に改めた。清獨は原文に従った。
- ・判読困難な箇所は□で残した。

明治三十九年

一 五月二十一日 府下単鴨村九七九 浩々洞^{注1}ニテ 暁烏敏^{注2}様
要事 本郷区弓町一丁目十六番地狩野病院方 宮沢政治郎
封書 巻紙 筆

此間ハ参洞種々御高教ヲ蒙リ難有仕合奉深謝候^{注3}

妄念ノ結晶ナル罪惡ノ凡夫ガ勝手ニ作リシ我儘ノ病氣ニ
対シ御丁寧ナル御慰問ヲ賜ハリ候事深ク感謝シ奉ルト共
ニ慚愧ノ念ニ堪ヘ不申候

余リ忘念ノ甚敷ヲ憫レミ給ヒテハ暫時ナリトモ真面目ノ
境ニ居ラシメ給ハル御警策ノ御手モ皆此煩惱強盛ノ者ノ
為メト深ク我身ノ罪ノ深キ丁ヲ懺謝シ奉ルト共ニ大命ノ
マニ／＼如何様ニモ相成可申候ヘ共昨今ハ余程宜敷候間
幸ニ御休神之程奉願上候

昨日ハ又姻戚ニテ候直治兄妹御尋ネ申上種々難有御示教^{注4}

ニ預り候事伝承厚ク奉謝上候
何レ当夏ハ緩々御高教ヲ仰ク事ニ候ヘ共不取敢右御礼迄
申上候

五月二十一日

敬具

宮沢政治郎

暁烏先生

御座下

注1 近住常観の欧州視察中、その私塾を預った清沢満之の下に集った者たちが名付けた。のち明34・1雑誌『精神界』を創刊（清沢満之主幹、多田鼎編集、佐々木月樵会計、暁烏敏署名人並に庶務）。

注2 あげがらすはや。非無、青鬼堂などと号す（明10・7・12〜昭29・8・27）。明達寺（真宗大谷派）十八世住職。

『嘆異鈔』の近代における発掘者として知られ、『暁烏敏全集』全27巻、別巻1（同刊行会刊、昭50・9・53・2）などがある。

注3 『暁烏敏日記』（暁烏敏顕彰会刊、昭51・3&52・3。以下『日記』と略記）明39・4・18に「午後、佐々木哲郎、花巻の宮沢政次郎と共に来。今夏花巻の講習会に行く事を約す。夕になりて去る。」とある。

注4 『日記』に「高橋勘太郎父逝去をき、宮沢の病気をきく。」（5・18）「午後、佐々木哲郎、宮沢直治、梅津せつ子三人来訪」「宮沢の病氣を見舞ひて／恵み切に迷ひの夢をさまさんとかけます水と病たふとむ」（5・20）と

ある。この歌は『精神界』6月号（第六卷第六号）へ感興欄にも発表。

二 七月七日 東京府北豊島郡単鴨村九七九 浩々洞ニて 暁

烏敏様 陸中花巻川口町 宮沢政治郎 葉書 筆

四日発御尊書着正ニ拝誦十三日夕刻当所ニ御光来可被下趣同刻停車場ニ御出迎可申義可成ハ其以前時間も被仰下候ヘバ難有候 御講話ハ十四日ノ午后より願上度都合ニ御座候 会場ハ光徳寺ト申ス御西派ノ寺院ニ御座候 右都合ニ聴衆ヘ広ク通告仕放候間不惡御承了奉願上候 先ハ右申上度 余ハ拝顔万可申上候 行路御安寧ヲ祈申候 草々

注1 「午後、佐々木哲郎、花巻の宮沢政次郎と共に来。今夏花巻の講習会に行く事を約す。夕になりて去る。」（『日記』明39・4・18）「六時半花巻に着。宮沢政次郎、宮沢直次、梅津善次郎、同せつ、三田のぶ（哲郎の弟三田憲石の妻也）迎ふ。」「夜に入りて政次郎、直次、伊藤直次（『法蔵』読者）島倉吉来。談尽きず。」（7・13）

三 八月十四日 石川県石川郡出城村 明達寺 暁烏敏様 親展 陸中花巻川口町 宮沢政治郎 封書 巻紙 筆

過る幾十日如来より給ハリし東北伝道の御任務ハ終了

して定めし温かき御家庭ニ御入らせ候事と存候 顧れバ
不可思議の因縁ニよりて尊師と値遇せる私共が十余日の
行動の无懺愧无作法なりし事深く御詫申上る次第ニ候
あゝ大沢十日の別れ何ぞ我心の弱く候ぞ 遠くなり行く
車輦の跡を目送しつゝ胸中の暗涙禁じ得ざりしハ何の為
めぞ 会者定離とハ常ニ聞馴れたる事ながら其時ニなり
てハ何の己れを制する助けにもならぬ腑甲斐なさ 飽迄
も愚病執着の悪凡夫と存候

盛岡の二日ハ如何に御任務の尽され候やらん 私共ハ二
日の後温泉より帰り申候 只今又精神界も着拜見致居候
とり／＼諸師の御感想皆難有御事ニ存候 光徳寺にて御
示し被下候某女史への御示しも難有存候

御郷里辺ハ未だ暑くや候はん 当方ハ最早目ツ切り朝夕
などハ冷氣を覚へ候 大抵七十度乃至五度迄ノ処ニ候
単衣ニてハ少シ冷氣過る程ニ御座候 四季も移り変り人
も昨の通りニてハなき世ニ候へど幸ニ変らせたまハぬ御
仏の御まことのミ心強く覚へ候 かすかなりとも御名の
中に住ミ申度心願ニ御座候

氣候転変の際特ニ御身体の御愛護專一ニ祈上候 (高橋寒
石兄よりハ肉の袋ハ具穢のものなれど広済証券の入りし
間ハ大切の者なりとの御注意を得候)

尚末筆ながら御家庭皆々様の御健康をも切ニ祈る処ニ御
座候

頓首

八月十四日

暁烏非無先生

御座下

政治郎

注1『精神界』第六卷第九号(明39・9)〈報道〉欄「陸中た
より」に「生は十三日より五日間、花巻町にて『歎異抄』
を講じ候。毎会、百余の人来り、少しは反応ありしやう見
受け申候。」「十八日、十九日の雨夜は、盛岡の説教場
にて説教し、心心映徹の感を受け申候。十九日の昼は、臘
扇会員と会食し、撮影し、午後は杜陵館にて講演を開き
申候。／杜陵館にて「死の問題」を語り、「二十日より
三十日まで、浄法寺の小田島家にあり。内、七日間、『歎
異抄』を講じ申候。四年前には高橋勘太郎氏外二名位の
信者ありし此村、今日になりて三十余名の聴講者あり。」「
「三十一日、花巻に一泊し、一日に当温泉に來り、午前
は先師の『我信念』を講じ、午後は現生十種の益を講じ
居候。」「来会者は三四十名にして、熱心なる人々も有之
候。十歳前後の男女の少年十名位、予に親み、講余は、
いつも室に來り候。念仏し、仏教唱歌を教へ角力となるな
ど、生は再び少年時代にかへりたることを感じ申候。」「
「十日にこゝをたち、再び盛岡に出で、十三日午前帰洞、」
と八月七日「陸中国大沢温泉にて」暁烏自身報じている。

補注『日記』(明39・7・11～8・12)及び『全集』別巻「暁

鳥敏年表」に詳しい。また、野本永久『曉鳥敏伝』(昭49・6大和書房刊)「浩々洞時代 一」(146・147頁)に簡潔に語り尽されている。『日記』より摘記、「二時半より『歎異鈔』講話。今日は釈尊、親鸞聖人の入道を語り第一節に因みて仏教の本義を語る。宮沢直次の父、伊藤和平、瀬川ふく其他男女七八来室。堀田庄太郎来室。夜、直次、政次郎、梅津、直次の弟他一人来。直次の弟曰く、人生の目的いかゞと。われ信眼のみありて之を見るを得べしと。」(7・14)、「二時半より『歎』の第二節に因みて学問已上の絶対信を語る。政次郎の父、妻、直次の母、小田島五郎の姉阿部こま其他多くの人来室。今日の聴衆は百余名也。」(7・15)、「午前、内村鑑三の信者齊藤宗次郎苐を持参。其の信を語る。この地にて『聖書の研究』四十部売れるといふ。この人の感化也。信徳を思ふ。」三時より『歎』の第三節に因みて倫理已上の信仰と悪人成仏の御法を語る。来者百五、六十。」(7・16)、「浄法寺の高橋勘太郎来、うれしうこそ。亦、野河健三。梅津せつ、三田のぶ等発起にて婦人会を開く。」三時より『歎』の第九節に因み信仰已上の信仰を語る。林正観来訪。今日来会者百七、八十、浄土宗の松庵寺和尚来。「夕、小学教師阿部晁、菊地竹次郎来。」(7・17)、「午前十時より講話、『歎異鈔』「そらごとたはごと」「一人がためなり」に結び味はふ。予定の如く五回に於て『歎異鈔』の概要を語りて他力信仰の味はひを語らしめ給ひしこと偏に加護の御手のあればこそと感謝にたへず。感極まりて泣かんとす。来者百余。高橋、

宮沢政次郎、直次、林正観、伊藤、上野等来室。午後零時より二時間ほど梅津善次郎の衷心をきく。憐れの情を催す。三時四十分の汽車にて盛岡に向ふ。」「短冊、林、鎌倉、上野、伊藤直次、齊藤。扇子、宮沢直次、政次郎。珠数、政次郎、直次、同父、高橋、三田のぶ、梅津せつ。志、瀬川ふく、伊藤直次、政次郎姉／梅津の扇に、苦しきに淋しきに御名を称へかへし御名に蜜あり御名は楽也」(7・18)、「朝、『我が信念』の序を草す」(7・20。盛岡の臘扇会員の印刷屋に刷らせた)、「(八月中行事予記らんに)社会経営の基礎／一、万般の経営の基礎は人にある。二、人の中心は人格にある。三、人格の中心は信にある。四、信は絶対信ならざるべからず。五、絶対信は仏教の根本義也。」(十一日、岩手仏教講話大要)、「十一時政次郎、直治と車を連ねて大沢に来る、二時也。」四時半より講話、先師の伝を語る。本日より先師の『我が信念』を語るに就いての序也。山に白百合を折りて室にさす。夜、伊藤直次、孤舟、宮沢政次郎、直治、賢治、嘉七来訪。」(8・1)、「九時より講話、先生の信仰に影響を与へたる思想を語る。後席、仏教二分(難易二道)を語る。会者二十余。盛岡の赤沢来。」四時半より信心十益の内冥衆護持の益に就て語る。夜、政次郎長男賢治(十一才)同甥豊蔵(九才)直次同徒弟嘉助と、小児となりて遊ぶ。」(8・2)、「八時より講話、『我が信念』三頁を語る。一の天地を語る。後席救済の二ヶ用(光明、名号)に就いて語る。」四時より講話、至徳具足の益を語る。夜、政、直、赤沢、きん、こと、

賢、豊、嘉等老幼交りて遊戯をす。」「夕飯の折、給仕の女、念仏して極楽へ行くとの信を述べ、うれし。」「(8・3)、「八時講話、『我が信念』四頁まで、信益を語る。後席救済の三方面の内、廃悪修善を語り、十悪六度を語り、楽天と鳥窠禪師との問答を語る。」「午後、小眠。入湯。政、直、孤舟、大坂(一ノ関小学教師)賢、豊、嘉助、弥吉、こと等にて鉛温泉に遊ぶ、膝館泰穂(宮沢の檀那寺の住職にして湯宿の主人)に会ふ。八景の絵などを見る。新鉛に遊ぶ。帰途政とこと子との問答に興を覚え、知らざるに來る。天久々に晴れて気がすがし。／夜、八時より転悪成善の益を語る。月色明也、皆既蝕を見る。小兒等に唱歌を教ふ。」「(8・4)、「八時より『我が信念』七頁まで。二席、智已上の信念を語る。」「四時より諸仏護念、諸仏称揚の二益について語る。志戸が平の温泉に散歩(直治、賢、豊、平右エ門、徳四郎同道)。」「夜、茶話会各自の所感を書かしむ。悪人正機につき人より受けたる迫害について質問あり。予之に答ふ。『歎異鈔』の第二節は罪惡に苦しむ者のみの味ふべき文也。」「(8・5)、「『我が信念』第三を講ず。」「午後、大衆と共に鉛に行く。三階にて至徳具足の益を語る。」「夜、老幼十五、六集りて遊戯す。」「(8・6)、「八時より鈴木草(卓)苗、道徳と宗教を講じ、予『我が信念』十頁まで講ず。」「午後小童來たり遊ぶ。」「四時より心多觀喜の益を語る。」「夜、茶話会所感を述べ、いろ／＼余興をして遊ぶ。出席者童子十一、成年者女十五、六。」「(8・7)、「八時より講話、『我が信念』十一頁より十二頁までを講ず。鈴木、倫

理の起源としてソクラテスを語り、基督教の起源を語る。」「午睡。入湯。小童八人來たり遊び歌ふ。四時より講話知恩報徳の益、常行大悲の益、入正定聚の益を語る。かくて加護の下に十種の益を講じ了らしめ給へるを感謝し奉る。本日来会者五、六十、二里を隔たる村より十四、五人來る。夕飯大衆と共にすごす。後大沢橋に散歩し小童と唱歌をうたふ。夜童子と遊ぶ。」「(8・8)、「八時より講話。『我が信念』十三、十四頁を講じ、倫理の終極は宗教なることを語る。鈴木、仏教の起源を語る。写真をとる。」「午後、いろ／＼の質問に答ふる講話をなす。／夕、散歩。夜、茶話会。十二時に果つ。」「(8・9)「鈴木先づ講じ、十時予『我が信念』を講じ了る。如來の加被力の下に首尾よく十日間の使用を完ふし、自他共に法味愛樂を得しこと感謝にたへず。今回初めて『我が信念』を講じ、先師の温容を髣髴の間に見、追回の情にたへず。而して如來の御力と先師の人格の御力の身に加るを覚えうれしさにたへず、涙にむせびつゝ講を了る。後、鈴木閉会の辞を述べて大衆一同に『我が信念』第二節をよむ。室に帰り仏前に額づきてうれしさに泣く。」「六時十八分にて盛岡に向かふ。宮沢恒治、伊藤直治、工藤倉吉、鈴木、梅津善次郎、同せつ子、宮沢いち子、三田のぶ子、宮沢嘉助、賢治等見送らる。」「(8・10)。

暁烏敏が東北地方と結ばれることになる機縁は、明治三十六年四月の「東北饑饉慰問行」(五十四)であった。「真宗大学丙申会」による饑饉救済の訴えが『精神界』広告欄に載せられたのはこの年四月号だが、『日記』四月三

日に「夕、藤田、土生二君来たりて丙申会を代表して東北の饑饉を慰問し来たれと言ふ。諾す。」とあり、これを受けて慰問の旅は行われたのである。すでに前月、『精神界』第三卷第三号〈報道〉欄「東京だより」中にも「北越より東北にかけて、殊に青森地方に於ける饑饉の聲は、引続き私共の胸を打ち来り候。此際修道の士は、先づ第一に人はパンのみにて生くるものにあらざることゝを忘るべからず、又他人をして之を忘れしめざることこそ最要なれ。真個の救済は、一に是に存するが故に候。一般救助上の施設は、実に此真個の救済のためのもの、又此真個の救済の上に行はれねばならぬものと存候、然らずば同胞は永遠に苦より苦に悶ふべく候。」と記されていた。暁烏は盛岡、沼宮内、戸田、葛巻、福岡、浄法寺、一戸、日詰、仙台を巡り、新たに小田島五郎、高橋勘太郎（寒石）とも知りあった。この旅にはじまる暁烏の東北との結びつきの意義を野本永久は次のように要約している（前掲書）。「この慰問行は、後、東北地方に精神主義を植え付け、仏法興隆の道をつける基となった。或時曾我量深が言った。東北地方という所は、仏法蒙冥の地で、誰もここに続いて教線をひくことは出来なかつたが、只一人暁烏さんだけがここに続いて教化の仕事をしていました、と。」

なお、花巻、大沢の講話に関連して、三十九年『日記』の表紙裏や裏表紙裏に講話案の他、次のような心覚え、メモが見られる。「政曰く 心はいかに／こと曰く 心は円きもの光るものにして内に仏あり。（十二才）／又曰

く 妾は身体は弱けれど心は強し。仏在せば也／政曰く 人生の目的いかゞ／こと曰く 母さんにたのまれて生まれたり。仏、妾に行つて来いと申されければ生れたり。この生に来れるは仏をほめ、世の人に平和を与えんが為也と／少女の信、嘉すべきかな（八月四日）」（表紙裏二）「御仏を親とよびつゝ御恵みの乳房をふくむ信のはらから／許しませ悶え生命の悶えの子悶えあればぞ御仏の友／御仏を親とたのみむつまじく手を取りゆかむ末のよかけて（政治郎）／いつまでもそのあどけなき笑顔にて仏の国の道しるべせよ（琴子）／御仏を互の上に拝みつゝ同じ心に楽し世を行く（梅津夫婦へ）」（裏表紙二）

四 八月二十五日 加賀国石川郡出城村 明達寺 暁烏敏様

御直披 陸中国花巻川口町 宮沢生 封書 巻紙 筆

残暑猶難凌候処為法愈御健勝ニ御活動被成候御事欣賀之至奉存候 御帰山後ハ定る南船北馬と言ふ風に伝道之為御忙敷御事と奉察上候 私共も御蔭様にて気分旧に復し日々无慙愧ニ暮らし居候 乍憚御放神被下度奉願上候 其後当方事情之内一寸御報申上度事ハ佐々木君之近状ニ御座候 先生御滞^{注1}浄中ニも左る事の有りしと承ハリ候不眠症頃日余程身体ニ影響せるものと見へ盛岡ニ出て岩手病院の診察を受たる処神経衰弱症にて二三ヶ月ノ静養ヲ要シ其間専門的読書は禁ゼラレ成丈煩惱ニ遠かるを勸

告セラレタル趣自業自得ニハ見て候へ共誠ニ同情ニ堪へざる気の毒之次第ニ御座候 人事不可測とハ言へ本人の心情を察すれば本学期を棒ニふる事の遺憾被思遣候 其ニ又義弟恒治の事先生の御書簡拝読之際ハどうやら疑問を解決して頂だき喜んで居る様結構なる事と存じ乍蔭喜ビ居り其後一向同家へ訪問もせずニ居り候処昨日一寸来て呉レトノ事にて往きて見候処問題ハ恒さんの件父兄の人達も手に余つた不得要領の件一時当惑致候 其ハ頃日ある問題が苦ニ成つて真面目に仕事することも出来ねバ当分何処かへ遣つて呉れと言ふ事 それで何日頃迄ニ帰てくると言へバ解決の出来る迄 そして仕舞にハと言へバ返つて来るやら来ぬやら分らぬなぞ随分不得要領の挨拶に父兄を困らせ居候 それから小生が段々中心の要求ヲ探り候タラ矢張り不得要領ニハ候へ共略左の事と被存候 只今の要求ハ北米行ニハ無論無之其活動も何を意味するやとの真摯なる疑問を起し来り候事と被存先決問題なる人生の根本義ニ突当り候ものと被存候故小生ハ不得止父兄ニ話して此人の目下の境遇ハ略左る病症ならんとの旨を話し候 佐々木君の如き今の病ハ丁度人生の行路ニ横ハる最大嶮難の高山を通過シタル揚句僅かの油断ニ小丘ニ躓キタルモノト被存又此人の(恒治君の)病ハ初め学窓の得力としてハ功名高貴万能力の小丘を目当として奮進之を突過せんと企てたる者が偶然ニもソコニ躓

蹶スル内ニ他ノ是非共超ヘザル可ラザル今の最大嶮山が目ニ入り候次第ト存候 ソレテ今の処ハ小丘突過の目的ハ已ニ自然的ニ忘レ去ラレ如何ニシタラ此最大難関を通過セント真面目ニ考ヘ出シタル状態ニ候事ト存候 ソレニ就てハ目下盛岡ニ佐々木君も居り又諸道友も有ルナレバ一時精神的放下作用トシテも盛岡ヘ往キテ皆様ニ種々の経歴を聞イテ見ルも藥で有り舛ウト申候 ソレデ今朝盛岡ヘ行タル筈ニ候 症こそ違ヘ同病相憐の人々佐々木君より得る処も有るならんと被存候 何卒御閑暇も被有候節ハ同人家庭迄ニても一言の御垂示を賜ハラバ幸甚ニ御座候 又佐々木君ニも御書簡ニても被下候節ハ小生にて御取次可申上候 先ハ右御教示を得度迄 時下折角為法御愛養專一ニ奉願上候

八月廿五日

草々

政治郎

非无先生

御座下

今朝奥様より子供ニ御書面被下大層喜び居申候 宜敷御伝声奉願上候 本日ニハ旧七夕にて軒頭青竹笹ニ色紙ヲ飾り候て中々面白く御座候 子供等の喜び候事ハ格別ニ候

暑氣ハ又盛返して七十五度乃至八十度位ニ相成り稲作ニ
 対し申分なき氣候 今四五日も无難ニ通過スレバ大勢ハ
 先定マリテ昨年^{注2}の憂を忘るゝ事もある仕合ト存候

注1 二戸郡浄法寺村滞在中の意。

注2 日露戦争による人・馬徴発に天候不順が重なり、明38年
 は記録的な凶作となった。実状は大浜徹也『明治の墓碑』
 (昭45・6 秀英出版刊)、斎藤博『民衆精神の原像』(昭
 52・9 新評論刊)などに詳しいが、『精神界』第六卷二号
 (明39・2)〈報道〉欄「東京たより」にも「兼て報道せ
 し東北の饑饉、益々惨状を加へ候事、悲みの極みに候。」
 として、宮城、福島、岩手三県の収獲高や窮民数を示し
 ている。「▲岩手県ノ平年収獲 五十七万四千四百石ノ昨
 年収獲 十九万二千石(三分三厘作)ノ同県人口 七十
 四万九千九百二十七人ノ内窮民 十九万四百二十二入」
 「戦争漸く終つて飛び立つ如く故郷に帰れば、老父は餓
 に病み、子は学校を止めて母の手助けをなし、妹のあら
 ざるを見て、その故を問へば、一家の急を救ふ為め身を
 苦海に沈めたりときゝし凱旋兵士の、反て戦友と共に戦
 場の露と消えざりしを怨むもありと報ぜらる。きくだ
 に断腸の外無之候。この時にあたりて、人々一盞の酒を
 節するも、また以て報恩の一助と被存候。」ともあつて、
 「東北饑饉義捐金」が募られ、浩々洞より岩手県庁に送
 られた。これに対して知事から礼状の届いたことが八月
 号で報告されている。

五 八月二十九日^{注1} 石川県石川郡出城村 明達寺 曉烏敏様

陸中国花巻 宮沢政治郎 葉書 ペン

先生其後御恙なく候哉 野生□□□□^{注2}罷在候 前便萍
 雨兄^{注3}ト恒治ノ件□□□□揮願上候 一寸御報申上候ハ
 一昨□□□□□□禪門ノ名物男釈元恭ト申□□□□人ヲ
 迎ヘテ一席ノ演説ヲ聴申候□□□□短カク何ノ取留タル
 聞事ハ無之候ヘ共座談ニ至リテハ中々ノ珍□面白キ言
 外ニ候 足跡五洲ニ遍ネクシテ搏虎屠龍的豪壯の快事ニ
 富タル二十一年ノ海外生活の倂随分壮烈ナル事ニ候 二
 十世紀式活動的日本人ノ標本トモ云フベキモノカ 面白
 キ人物ニ候 年齒四十一ト承リ候 先途遙ナルベク存候
 御本山改革ノ件等モ言ヒ及ハレ清沢先生ノ人格ヲ惜ミ居
 ラレ候 二十世紀式ノ人格ハ躬行実践的ニシカモ力量ノ
 競争ニ外ナラズトハ此人ノ主張ト被存申候禪門的修養ノ
 中心ニ支那的実利ノ衣ト英国式堅実ナル裝飾ヲ施セルガ
 此人ノ面目カト存候 他山ノ石トシテ珍重スベキ人ニ御
 座候 折アラバ御意見ヲモ御伺御申上度候先ハ右迄

草々

注1 年号不明。内容から三十九年と推定。切手部分破損。

注2 破損のため五行、各行約四・五字分欠。

注3 佐々木哲郎の号。

六 九月四日 加賀国石川郡出城村 明達寺 曉烏敏様 平信

陸中花巻川口町 宮沢生 封書 巻紙 筆

一日発御懇書只今着拝誦仕候 何ヨリも慈光照護ノ下御健勝ニ為法御尽瘁被為有候御事喜悅ニ堪ヘザル次第ニ御座候 恒治及萍雨両兄ノ為メニモ懇ニ被仰下其後恒治ノ状態何程ソムカ御慈悲ノ諒解シ来リ候傾向有之御示シノ如ク已ニ撰取光明中ニアル彼ノ上ニ早晚歎喜ノ情ノ起ルヲハ疑ヒ不申候 其間凡夫トシテ思議スベカラザル消息ノ存ジ候事ト存候 去ル廿九日寒石兄ノ急報ニヨリ小生モ盛岡ニ参リ候 ソハ萍雨兄ノ容態只ナラズ心的状態常軌ヲ逸シ兼ネ間敷模様トノ事ニ急ギ出向仕候処其前ニ寒石兄大抵所置ヲ付ケ居ラレ則チ明后六日仮結婚ヲ為シ数十日新婚旅行ノ後病状サヘ宜シケレバ相携ヘテ東上シ一ハ大学ニ一ハ何カ専門ノ学校ニ入ルコトニ取極メ候トノ事 其間寒石兄ノ骨折リ一方ナラズ覚ヘ候

〔約四百字省略〕

本月中旬ニ御東上トノ御事小生も太命ノ下リ候ハズ十月末カ十一月初メ又上京セント存居候 当年ハ二百十日ト云フ農家ノ厄日も无事ニ済ミ先豊年ニ違ヒナキ事ト存候 何寄宜敷事ニ候

鈴木卓苗兄ハ本日仙台ニ入り十一月迄曹洞宗中学林ニ教鞭ヲ取ラレ十二月ハ入営シテ兵役ニ服セラルトノ事

一昨夜ハ月明ニ乗ジテ梅屋敷ニ行キ阿部晃君ノ満韓旅行談ヲ聞取り申候 又一興ニ候 先ハ右ニて懶筆仕候 乱筆御判読可被下度候 乍末筆御家庭皆々様の御健康ヲ切ニ祈り奉候

九月四日

草々

金蓮生

非無先生

尊下

〔約百字省略〕

尚一事の申遺候 多田様^{注1}ノ御父上御遠逝之御事ハ同一道ノ先覚者トシテ痛マ敷御事ニ候 全ク頼マレヌ世ニ候 去ヌル七月ノ御講話ノ終日ニ此内二人ハ明年ノ今頃迄ニ無キ数ニ入ル人アルベシト仰セラレ候事ノ痛マシクモ的中スル世ノ様コソ便リナク候ラヘ 毎日熱心ニ聞キニ来リ候及川ト云フ方ノ次男紅顔十九才中学ノ青年ハ惜シヤ幽明界を隔テ候 全ク御仏ニ依ラデハ哀レ限リナキモノニ存候

注1 多田鼎（その父は8・22死去）、佐々木月樵と共に浩浩

洞、『精神界』の中心メンバー。著書に『正信偈講話』『恩

寵の宗教』（共に無我山房刊）など。明36・4に千葉教院

を設立。やがて『精神主義』に疑問を感じ、大6に至ッ

て曉烏と袂を別った。昭12・12・7没。のち同朋舎よ

り『多田鼎選集』全三卷(昭15・9・17・12)が刊行された。

佐々木はのち真宗大学学長をつとめた。著書に『実験の宗教』(井上書店・丁字屋書店刊)、『親鸞聖人伝』(無我山房刊)など。大15・3・6没。『佐々木月樵全集』全六巻(昭2・9・4・9萌文社刊)がある。

七 九月十日 東京府北豊島郡 巢鴨村九七九 浩々洞方 曉
鳥敏様 平安 陸中国花巻川口町 宮沢政治郎 封書 巻
紙筆

〔前半部略〕^{注1}

節秋ニ入り夜な々々月ハ澄ミ虫の声もあはれニ候 定メ
テ詩囊も豊かに今年の実りニも比すべき御事と存候 折
角御育ての上誌上にて御示シ被下度奉願上候
朝夕冷氣身ニ泌ミテ参リ候 温暖ナル春風夏月ニ浮カレ
タル人も蕭殺セル秋ノ氣ヲ迎ヘテ真摯ナル自覺ノ起ルベ
キトト存候 教界も政界も総テノ人事界是ヨリ又多事ナ
ルベシト存候

右不取敢御報旁余ハ後便可申上候

草々

花巻にて

九月十日

寒石生

金蓮生

非無先生

御座下

注1封筒署名は宮沢のみだが、高橋勘太郎寒石と連名の書簡。全体の四分の三程は高橋が佐々木哲郎の結婚について報じた部分、省略。ひきつづき約五百字省略。

八 九月三十日 東京府北豊島郡巢鴨村九七九 浩々洞ニテ
曉鳥敏様 親展 陸中国花巻川口町 宮沢生 封書 巻紙
筆

天地森嚴ニ肅殺ノ氣ヲ帶ビ来リ朝夕冷氣ノ身ニ迫ルヲ覺
ヘ申候 大光照護ノ下益々御健勝ノ御模様何ヨリも喜ハ
敷次第ニ奉存候

今朝久振リニ御紙面相遣拝誦難有存候 諸友ニも相伝可
申候 南船北馬伝道ニ御尽瘁之中ニも東海駿陽ノ眺メ等
ハ如何ニ御旅情の慰メ被成シカラ想察仕候 私共も御蔭
無事慚愧知らぬ日暮ヲ致居候 先生ノ仰セラレシ凡夫ハ
凡夫ラシクノ御言バニハ一時少ナカラヌ語弊ノアルベキ
ヲ内心ニ思居候ニモ不拘真実ノ処目玉が二六時中只一ノ
清浄ナルモノもナキ素凡夫ナルヲ思ヘバ呆ルノ外無之
候

幸ニ御仏ノ恵ミニ望ヲ起ス外無致方事ニ候 此事懺悔ノ
心ヨリ申上置候 萍雨兄ノ近状ハ別紙ノ様今頃ハ酔モ少
シハ醒メ候カ 皆御計ラヒアル処ニハ可有之候ヘ共一時

ノ酩酊加減ニハ介抱人モ手ニ余リ候事ニ存候 外諸友ハ格別ノ事も無之暮居候

寒石兄ハ其後音信打絶て無之候へ共或ハ近日当地ニも参ラレ候ナラント存候 ソハ萍雨兄ト会合ノ席ニも有之事ト存候 折々先輩ノ方ニ叱ツテ頂クガ難有存候 左ル丁もナクバ我等惡童ハ何ヲスルモノカ分リ不申候 日々夜々ノ行動妄念如何ニ无明ノ醉ノ強キモノカ愚病ノ我々ハ手モ付ケラレヌ次第ニ候 境ハ心ヲ移スモノカ弱キモノニ候 アラヒザラヒ発イテ見テも名利ノ惡妄念ナラデハナキ我ニ折々御名ノ称ヘラルゝも不思議ニ候 先生ノ勝負事ニ關係セヌトノ御言ハ轟々此愚ナル心ニもの致候 詮ズル処私共惡凡夫ノ煩惱ト申スモ些ノ榮耀カ榮華ヲ望ム心儘押付ニモ何ウニカ成リソニ候へ共悲イカナ抜ク丁ノ出来ヌ妄念ハ勝他ノ一念ニ候 昼夜此心ヲ攪キ廻ス賊ノ張本ハ慥ニ此者ニ御座候 只々仰テ大悲ノ如来御手ヲ^{ママ}仮シテ此惡賊ヲ退ケタマフ時アルベキヲ信ジ申候 ソレニ氣ノ付キ候時ハ先生ノ如ク成丈其勝敗ヲ見聞セヌ様近寄ラヌ工夫ガ肝要カトモ存候 内心ノ強賊頑固ナル丁ニ候 ソレニ付テモ世ノ趨勢ハ傷マシク候 弥増弱肉強肉ノ事實ハ顯レ来リテ正ニ過日ノ電車騷^注キ等も何モ厘ノ銅貨ニ血ヲ流ス馬鹿モナカルベキニ只感情ノ衝突ガ大ナル溝^{ママ}岳ヲ築クガ嘆カハシク候 富ヲ驕ラヌ富豪モ无ク貧シクシテ恨ムル処ナキ丈夫ノ士も少ナキ今日御仏

ノ御旨ヲ承ケテ此地上ニ平和ノ天国ヲ築キ上ケントスル先生方ノ御苦勞ヲ察スレバ誠ニ多事ノ秋ト存申候 切ニ御愛養ノミ祈ル処ニ御座候 先ハ近状順序もナク書キ列ネ申候

九月三十日

風塵埋没中ノ

素凡夫

ヨリ

非無先生

御座下

当地ノ昨今ハ天氣晴朗一年中尤好時季ニ候 稲ハ穫リ候へ共褒メ過ギ候傾有之候様子ニ候 併昨年ノ比ニハ無之略平年ニ近カルベキカ

屋上ノ展望も又面白ク候 北ニ岩鷲ノ秀峯アリ 東ニ早地^{チネ}峯山屹トシテ四時雪ヲ頂キ西南遙ニ姫神嶽ノ聳ユルアリ 各々海拔六千余尺近ク眼前ニ森嚴ノ秋ヲ飾リ申候

三四日中ニ当地氏神ノ祭礼三日有之候 其次ノ日ハ汽車博覽会ガ来ルトノ事 大船渡開港鐵道ガ又再燃致候ニ付^{ママ}憐町^{ママ}黒沢尻ト我田引鉄^{ママ}ノ運動怠リ無ク候 看来レバ余リ面白クモナキ処ニ又面白キ処モアル様ニ御座候

上京ハ余程遅レ候事モヤト存候 何事モ御計ラヒノ儘ニ御座候

暇アルトキハ寒石兄ヨリ借受候白隠全集ヲ読居候

注1 東京市電値上反対デモ。三月より反対運動盛り上り、八月一日値上認可をうけて九月五日暴動化。軍隊、騎馬巡査出動して鎮圧。『精神界』(報道)欄「東京たより」でも折々報じている。十月号(6巻10号)より紹介する。

「一。廃兵院、開かれ候。此一事実に、我國民が公けの手を借らずして、家族相助け合ふ風習の強きことも認むることの出来候、喜ばしき様にも覚え候。／一。電車問題、穩に相成候。此上愈々会社の方に於いても、充分に公共の便宜を計る様勉めねばならずと存候。／一。巷間、時に將軍及び富豪に対して怨恨熱罵の意を洩し、兵卒及び労働者に対して同情の思を含める俚謡を歌ひて、人心を激動せしむる者有之候由に候。心ある者は、之に察する所なかるべからずと存候。」

補注『日記』39・9・30に「不在中宮沢恒治来る。」、また10・6に「八時品川着。宮沢恒治あり。予の鬚なきを以て見まがへり。精養軒樓上ラムネ飲みつゝ種々の問題に就いて語る。」とある。

九 十一月二十一日 加賀国石川郡出城村 明達寺ニテ 暁烏
敏様 親展 陸中花巻 金蓮生 封書 巻紙 筆

日増寒冷ニ相成申候

慈光照護之下貴体御恙無ク御消光被為有候哉乍蔭御健勝
ノミ是祈候

久敷御無沙汰申上候 私共も御蔭ニ安泰ニ罷在申候
前便ニ私出京スベキ様申上置候処其後都合ニヨリ延引今
ニ在宅致居候 如何相成ルモノヤラ大命ノ下ル処一寸先
キノ予期も覚束ナク候

〔約八百字省略〕

世ヲ拳ケテ不急ノ事ニ騷キ廻リ前後モ分カデ狂ヒ廻ル時
大法ノ御宣伝誠ニ御骨折ノ事ニ候 折角御目玉ノミ專一
ニ祈り申候

時下夜も長ク読書ノ快味も又一段ノ御事ト存候 瞑想沈
思ノ間ニ得ラレシ御感想折々ハ御頒チノ程奉願上候 靈
界饑渴ノ衆生ハ夫ノミ樂ミニ候 先ハ右久々ニて御無沙
汰御詫旁申上候

十一月二十一日

草々

金蓮

暁烏非無先生

御座下

氣候ハ段々寒ク候 過日ヨリ式回程雪降り申候 寒暖四
十度程日ハ四時前後ニ暮レ陰鬱ニシテ日色モ薄ク花も凋
ミ草も枯レ満目蕭条ノ体ニ候 若シ浄土ノ春ニ復活スル
ヲ知ラズバ人生ノ秋又如何ニ物悲シキモノニ候ハンカ

明治四十年

一〇 一月一日（四十年ノ元旦）東京市北豊島郡巢鴨村九七九
浩々洞 曉鳥敏様 陸中花巻川口町宮沢政治郎 葉書 筆

謹賀新年

昨年ハ不思議之御縁ニ因リ種々御厚情御指導ヲ蒙リ難有
感謝之至奉存上候

慈光之下益々御多祥ニ御超歳御事珍重之御儀奉賀上候

野生も御蔭ニ辱齡ヲ加ヘ申候 乍末筆御洞各位様ニも宜
敷御致声奉願上候

先ハ年頭之御祝詞迄

草々

一一 二月二十一日 加賀国石川郡出城村 妙達寺 曉鳥敏様
親展 陸中国花巻川口町 宮沢政治郎 封書 巻紙 筆

余寒尚難凌御座候処慈光之下益々御清勝ニ為法御尽瘁被
為有候御事奉賀候

其後ハ打絶テ甚御無沙汰ニ打過居申候 放逸懈怠ノモ

ノ、常トテ浅間敷次第誠ニ慚愧ニ堪ヘサル次第ニ御座候
幸ニ御海容之程是祈候 東京ニノミ在セラレ候御事ト存

居候処誌上ニヨリ御郷里御在宅御事拝承候次第ニ候 尊

地も北国ノ事故定メテ未ダ寒氣ノ強キ御事ト存候 下地
辺ハ尚未ダ嚴冬ノ氣ヲ脱セズ華氏ノ三十度内外ヲ上下致

居候 折々寒風ニ雷ヲ交ヘテ凄マジキ冬景色ニ候 私モ

陰曆越年ノ地方ノ事として旧臘来不急ノ役務ニ営々トシ

テ日々ノ日暮ラシ誠ニ／＼報謝ノ御称名も細々ニ无懺愧
ノ日送り致居候

佐々木君ノ神經衰弱も未ダ快癒之運ニ至ラズ目下郷里ニ

静養中ニ有之寒氣も相去リ候ハゞ必快復ノ期アルベキト
ト存候 何事ニも凡夫ノ浅慮尽キ果テタル処ニ深キ大命

ノ在セラレ候事ト存候間今回ノ同君ノ上ニ下レル事共も

深キ覚召ノアルナラント存候

年明ケ候テ以来モ世ハ種々ノ得手勝手ナル慾望ノ衝突ヨ

リ足尾ニも騒ギ起リ^{注1}其他一切ノ人事皆仏陀威神力ヲ知ラ

ヌ人ニヨリテ各地ニ演セラレ候事ハ嘆ハシキ次第ニ御座

候

就中一度モ御法ノ庭ニ集ヒ候人ノヨシヤ深ク御旨ノアル

処ヲ意得セヌ為メニもアルナガラ新紙ニ浅間シキ所業

ヲ摘発セラレ候ヲ見候ナドハ誠ニ／＼法ノ為メ嘆ハシク

も浅マシキ次第ト存候 新紙ノ記者ガ得々トシテ愚弄ノ

筆ヲ用テ之ヲ書ク丁実ニ苦々敷次第ニ御座候 何一ツ宿

業ノ為ス処ニアラヌハナキナガラ^{注2}為法ニハ如此モノハ

獅子身中ノ虫ニ御座候 近来ノ聖書ノ研究内村氏ノ述懐

ニも其消息ハ洩サレ居候事ト存候

誠ニ慾界ノ習ヒトハ云ヒナガラ尤モラシキ美名ノ下ニ我

モ人も虎狼ノ心ヲ以テ争奪ニ勉メ居候事真ニ浅間シキ次

第二御座候

煩惱ノ氷解ケ功德ノ春水満チ充ルハ何時ノ事ニテカ有カ

凡夫ノ計ラヒニハ何一ツ誠ナルハ無ク御座候 幸ニ仏陀ノ御旨ヲ少シニテも味^{マツ}ハジテ頂キ候身上ニハ凡夫ニハ凡夫相応ナガラセメテモノ嗜ミコソ肝要ト覚ヘ申候 サハ言ヘ我ヲ顧レバ浅マシキ无慙愧ノ日暮ラシニハ我ナガラ恥カシキ限ニ候

先ハ久々御無音ノ御詫旁申上度迄如此御座候

頓首

二月二十一日 燈下乱筆

金蓮生

非无先生

御座下

御母上様奥様皆々様ニも宜敷御伝声奉願上候

乍末筆各地流行感冒甚敷場合特ニ皆々様撰生御大切ニ願上候

注1 明40・2 足尾銅山で坑夫、職員と衝突、6日暴動となり、

7日軍隊出動して鎮圧。

注2 暁烏は内村鑑三に共鳴を示し、『聖書之研究』(明33・9 創刊)も読んでいる。政次郎も、斎藤宗次郎の縁もあつてか、読む機会はあったと思われる。

一一 六月十七日 東京府下北豊島郡巢鴨村九七九 浩々洞

暁烏敏先生 外御在洞諸師御中 陸中国花巻川口町 宮沢生 葉書 ペン

其後^{注1}ハ久々御無沙汰申上候 陰鬱の氣候にも別段御障リモ無之御消光被為有候哉 折角御自愛御養生の程奉願上候度々御消息及御書冊被下難有御礼申上候 其都度御挨拶モ不申上失礼にのミ打過候段御免被下度候
下地ハ旧に依り変りたる事モ無ク目下農桑繁多の期節ニ有之養蚕ハ三眠仕候 挿秧ハ大抵相済申候 氣候モ少々寒ク候ヘ共先ハ宜敷方ニ御座候
先ハ久々御無沙汰御申訳旁々 過日ハ御病氣を祝へと被仰下候ヘ共凡情御祝ひの文藻モ無之候間謹ミテ御養生專一に願上ると言ふに止メ申候 余ハ何レ後便に可申上候

草々

六月十七日晴天の日(久しき霖雨ヨリ晴テ)

注1 『日記』(明40・5・19)に「留守中、宮沢政次郎来、逢はざりし事うらみ也。」とあり、また同じく「五月日用帳欄」同日の項に「宮沢政次郎志 一、〇〇」と記録されている。

注2 『日記』(明40・6・14)に、著書『求道録』(同月一日 浩々洞出版部刊)を、政次郎を含む十二人に送った記事がある。

一三 六月二十六日 東京府北豊島郡巢鴨村九七九 浩々洞ニ

テ 暁烏敏様 至急親展 陸中国花巻川口町 宮沢政治郎 封書 巻紙 筆

時候柄鬱陶敷天氣打続申候 慈光之下御變りも無ク御暮
シ被遊候哉 為法益々御自愛專一ニ奉祈念候

本月誌上卷頭之御所感^注小生ノ胸ニも今拝読中慥ニ不少共
鳴セラレ候モノカラ懺悔旁申上候 御執筆ノ御動機ハ確
カニ佐々木君ノ為ト奉推察候 同兄ノ近状誠ニ氣ノ毒ニ
堪ヘ不申候ヘ共皆意味深キ御親ノ覚召ヨリ後來ニ至大ナ
ル任務アル次第ト存候 昨年迄ハ談論颯爽人間最後ノ扨
リ処ニ安住セル如ク見ヘシ同君ノ如何ニ凡情ニ知レヌ業
因ノ支配トハ言ヘ今ハ咫尺も分カヌ迄混沌トシテ闇路ニ
迷ヘル有様ハ不思議ト思ハルゝ位ニ候 折々ノ面会ニ何
程申スモ了解ハ無之何ヨリも自己ノ病ト云フ觀念ハ中心
ヲ支配シ居リテ其他ノ事ヲ思考スル余裕ナド一切相見ヘ
不申變レバカクモ變ルモノカト凡情ヨリ不思議ノ程ニ感
居候 然シテ殊更无慙愧ナル野生ガ師ニ中心ヨリ懺悔ス
ベキハ昨夏御巡化ノ砌リ伺候凡夫ハ凡夫ラシクノ御語ニ
不少不滿ニ感ジ凡夫ナレバコソ心ニ任セズ嗜メトコソ仰
ラルベキニ凡夫ラシク放任セヨト聞ユレバ随分酷ナル御
示シト存ジ居候ヒシ

実ヲ申セバ佐々木君ノ信念も如此一点不用意ノ処ヨリ収
ムルニ難キ身上ノ大破綻ヲ来セルモノゝ様ニ存居候 皆
コレ私ノ計ラヒ心ニ過ギザリシヲ大悲ノ如來ノ御前
ニ取分ケ師ノ前ニ明ラサマニ懺悔告白スル次第ニ御座候
何一ツ思フニ任セテ出来ル次第ナラバ誰カ三惡道ノ苦患

ヲ恐レテ常住ノ安樂ニ帰セザルモノアラシ サレド宿業
深重ノモノ決シテ其処ニ心付カヌコト是レ一ツニテも凡
慮ヲ絶スル次第ト存候 一切ハ大御親ノ御手ノ中ニアリ
ナガラ彼是レ差別ノ候事ハ皆是レ宿業ノ所作ト奉存候
佐々木君ノ如キモ正ニ〳〵撰履ノ御手ニアリナガラ水中
渴ヲ叫ブ如ク悶ヘ苦シミ候事偏ニ業力ノ所化ニ候

サレド私ハ堅ク信ジ候 業力ハ業力ナリ撰取ハ撰取ナリ
如何程業報ノ所作ニテ迷ヒ狂フ事ハアリトモ間違ハヌ撰
取ノ御手ハ闇極マル処夜ノ明ケル時アルヲ信ジテ疑ヒ
不申候 近頃棚倉ノ鈴木力〳〵老人如來ノ御使ヒトシテ信後
相續ノ検分ニ被参数日間難有キ御縁ヲ頂キ申候 大様ナ
ル私共ノ此老人ノ前大ナル叱責ヲ蒙リ申候 誠ニ御親切
ノ次第ニ御座候 近頃ニナキ心持居リ心垢ノさらヘヲシ
テ貰ヒ候 老人ハ機ヲ責ムルヲ酷甚ニシテ法ノ真ナルヲ
如來ノ御救済ノ御手強キ事ニノミ氣付キテモ我身ニ其御
誠ヲ確カニ貰ヒ受ケテ憶念ノ心堅カラザルハ未信ノ機ナ
リト迄叱正セラレ候 殊ニ回国巡リニ鍛ヘタル論難ノ鋒先
ノ鋭キ只降服ノ外無之候 サレド今ノ老人ニハ昔シ論議
問答ニ勝タンヲ心掛タル過失ヲ懺悔致シ居ラレ候 サ
レバ此老人ニヨリテ昔シヨリハケマシキ異解ノ種類ヤア
ラユル相違ヲ聞ク事ヲ得申候ヒシハ幸福至極ノ事ニ喜
ビ居申候 佐々木君モ二三度被參候 未信ノ機ナレド御
縁ハアリト被申居候

同君モ来月ハ富岡君ノ郷里ニ行カレ暫時世話ニ相成候由
大悲ノ御手ハ如何ナル処ヨリ醒覺ヲ与ヘ候ヤ凡情ノ計リ
知ル処ニアラザルモ兎ニ角モ其思ヒ立チ正ニ大御手ノ接
門ニ有之事ト存候 同君ノ苦悩ノ激甚ナルハ今更ナガラ
其慾望ノ強盛ナルニ基因スル事ト存候
先ハ順序もナク蕪雜ノ言書列ネ候 拜読余端之ナク感謝
ト懺悔ノ思起リ候マヽ茲ニ申上候次第ニ候 草々

六月廿六日

政治郎

非无先生

尊下

本誌ハ直ニ佐々木ニ贈リ見セ可申存候
尚一寸申添候

昨年ヨリ勿々已ニ一年ノ今日回想スレバ無常ノ世ハ一日
モ止マラズ光徳寺講座聴衆中此中ニ二人ハ必ズ一年ノ後
ナカルベシトノ御宣言ハ今ヤ実ニ相成リテ當時参リ居候
上野夫人ヤ及川氏ノ少男丁年位ニシテ死去セラレ其他ニ
も野生ノ知ラヌ物故セラレ候人も有之ナラント存候
呼吸ノ中ニ生ラ保ツ居ル我等ナレド同一御親ノ下ニ生
ルヽ約束ニハ同ジ別離ノ悲シキ中ヨリも力強キ信念ヲ喜
ブ斗リニ御座候

注1『精神界』第七卷第六号(明40・7)〈精神界〉欄「病友

に寄する書」(社説にあたる欄。無署名だが多くの場合を
曉烏が書いている。)不治の病に罹った友が、学校も事業
も断念せざるをえず、勇気も起らず、刻々にただ死を待
つのみの身にいかなる向上の道があるかを尋ねて来た
のに対する返書の形をとった一文。羨ましく見える健康
な友人も死の前では同じく危いものであることを指摘
し、病氣になった時の方が「心常に内面に向ひ」、「自覚」
や「確信」を深めるのに意義が大きいと述べ、師清沢満
之の病者の心得からその三「最後の救済に就て安心す
べき事」などを引用して、「死の問題に明なる解決を得」
ることが「向上の道」に入る大前提だと言う。死の前で
は「財も、名も、位も、学も」「世も、人も」、「自己の身
体も、精神も」皆頼むに足らないのが「人生の実相」で
あり、「自力の無効を悟り、世の無常を感じた」時に「救
済の新衣は我等に着せられる」のだとして、次のように
まとめている。「病によりて赤裸々に死の前にたちて自
己の腑甲斐なき、世のよるべからざるを知りて、主観の
上に於ても、客観の上に於ても、煩悶より煩悶に入り、
地獄より地獄に旅するより外に仕方なき身といふ事
が味はれ候ひなば、たゞ／＼仰せのまゝに如来大悲の御
手にすがり、助けずは何を力に世にあらんの、大慈大悲
の如来の大誓願力にたすけましますと帰命するの外無
之候。」(圈点省略)

補注 この年夏の講習会には多田鼎が招かれた。出発(7・
25)、花巻(26・30)、盛岡(26夕・8・2)、日詰、花巻

を経て大沢（8・2午後〜6）。詳細は『精神界』第七卷第九号（9月号）〈雑纂〉欄「雲水日記」（多田）参照。

「黒沢尻に到り、宮沢直治に会ふ。かくて九時二十分、花巻につきぬ。宮沢政次郎氏始め四恩会の諸道契、懇に迎へられる。安浄寺に入る。」（7・26）、「講筵には、自力進修と他力帰命とを語れり。夜は妙円寺にて、「敬の宗教」を宣べ、道契四名と共に、深更、月明を踏みて帰る。」

（27）「講筵には、寂寥、惶怖、種々の苦痛を語りて、罪惡の自覺に及び、大悲実在の信念を宣べぬ。夜は談話会あり。」（28）、「講筵には、二尊の遣喚を宣べぬ。夜は妙円寺にて「仏教の人生觀」を語れり。高橋勘太郎氏、遠く浄法寺村より来り訪はる。喜にたへず。」（29）、「尊号の本義と信後の生涯とを語り、法縁の不可思議を宣べて、感恩の思にたへず。道契一同の奮勵を望みて、講を終はりぬ。慈光婦人会は、昨年曉烏兄の此町に来れる折、始めて成れるもの也。其諸姉に対して、現在生活における信念の威力を談ず。」午後六時、四恩会の諸兄に送られ、高橋氏と共に盛岡に向ふ。」（30）、「日詰より再び花巻に入りぬ」「安浄寺に憩ひて、午後二時、宮沢恒治氏及び梅津君と共に大沢に向ふ。」四時、対岸の講堂にて、法筵を開く。「会衆四十名に余れり。林正因氏、開筵の辞を陳べられ、帰依文合誦の後予は「救済論」の第一として、釈尊の人格をたゞへ、釈尊を仰ぐこと、即ち入道の一門なる旨を宣べぬ。」（8・2）、「六時、楼上の我室に本尊を安じて、諸道契と共に、『正信偈』、『和讃』を拝唱し、『御文』を誦して、『仏教聖典』を輪読す。尊嚴の

氣、肅として胸に逼る。爾後、毎朝、此の如し。九時、講筵。「法」を知ること、亦入道の一門なる旨を宣べぬ。十時半、少年会。会衆二十名にも及びけむ。共に「三宝」を歌ひて後、熊の話を語る。浄法寺村より来会せられたる高橋令室に会ふ。午後三時、講話。「求道者の模範としての親鸞聖人」を宣ぶ。又諸友と道を語る。夜、茶話会あり。」（3）、「講筵には「僧伽」の意義をのべて、其成立発展の歴史を語り、道縁の不思議を省察して、大道に入るべき旨を語る。少年会には、讃唱の後、林氏、独逸の御伽話を語り、予は源信僧都及び其母君を語りぬ。午後の講筵には、「信行及び其本末」を講じぬ。夜は茶話会あり。」（4）、「午前の講筵には、始めて先師の遺文につき、他力信仰の靈威を宣べぬ。十時半、少年会。阿部晁民（氏）、猫の話を語られ、予は「敬の話」を語る。中に瓜生岩子とカーライルとの実行を伝へぬ。宮沢氏、少年会の開筵を告げられる。午後、多くの道友と共に歩いて一里奥なる鉛及び新鉛の湯の村に遊ぶ。幽邃の趣、人に逼るを覚ゆ。路に白百合の花多し。鉛なる膝館氏の三層楼上にて、法筵を開く。林氏の挨拶の後、予は「余裕」を語る。」「黄昏、大沢にかへる。」「夜、講堂にて、簡単に「精神主義」を宣べ、次に多くの質疑を受けぬ。」（5）、「午前九時、講筵を開き、信仰の生活を宣べぬ。先師の御命日に当り、図らずも陸中の山村に在りて、新たな道契に対して、先師の遺文を講了す、何等不思議の次第ぞや。感謝、已む能はず。『懺悔録』の一節をも拝誦して、講話を了ふ。林氏、閉会を宣せらる。水辺に下りて、一

同撮影す。」「予は午後二時、宮沢直治氏と共に、諸道契に別を告げて、此清麗の仙郷を去り、折々襲ひ来る細雨の間を経て花巻に入り、宮沢氏に息ふ。氏及び父君、令室、政次郎氏令室、令弟、令妹の歓待を受け、午後五時四十分、諸道契に送られて、将に花巻を去らむとするや、村井庄二郎氏、俄に盛岡より来りて別辞を陳べ、厚遺を贈らる。感謝にたへず。」(6)なお、花巻における講本として『第五祖の『二河・諭』の訳文』、大沢におけるそれとして『清沢先生の『感謝』の一枚摺』を用意して行っていた。

十四 十月八日 東京府北豊島郡巢鴨村九七九 浩々洞ニテ

暁鳥敏様 親展 陸中国花巻川口町 宮沢政治郎 封書
巻紙 筆

日々冷氣相加候処

慈光之下御身御健勝ニ益々為法御尽瘁御事大慶之至り奉存上候

久敷御无沙汰申上候段幾重ニモ御海恕被成下度候

先月ノ精神界御所載ノ御在郷ノ日ノ御所感^{注1}心弱キ私モ暗涙ト共ニ拝読仕候 誠ニ日々夜々愚痴无智ナル日暮ラシ致シ絶テ善キ事ハ思ヒモヨラズ一身ノ仕末スラ思フ様スル丁能ハヌ力ナキモノ願レバ種々ノ感想禁ズル能ハヌ次第ニ御座候 殊ニ此頃ノ如ク燈火親シムベキ永夜トモ

相成候へバ何トハナシ懈怠放逸ノ身ノ厳シキ御警告ヲ感ジ申候様之次第ニ候 御消息ニヨレバ日曜会^{注2}ヲモ御開キ被為有候由誠ニ結構ノ御催シニ候 実ニ苦悩多キ此界ニ於テ一人ニナリトモ御慈悲ノ思召ヲ御伝へ成サレ候ハシ事至極ノ御事ト奉存候

今回直治氏等御尋ネ申上候由定メテ^{注3}迂生同様ノ日暮ラシニ追ハレ候同氏等モ厳シキ御警策ヲ感ジ候ナラント奉存候

又御尋ネノ佐々木君モ漸々快復ノ模様ニテ過日御来訪ノ節ノ御話ニハ石ノ巻ナル中学校ニ助教ニ頼マレタレバ行キテ見ルトノ事申居ラレ候

伊藤雨華氏モ无異一二日前上京セラレシヤニ承リ申候外ニ格別ノ異動ハ無之候 只信ノ友ノ余リ殖ヘモセヌニ愈々難信ノ御法ノ尊キヲ知ラレ申候

先ハ久々御無沙汰御挨拶旁申上度如此御座候 頓首

十月八日

金蓮

迂生

非无先生

待史^{注4}

余リ御迷惑恐入候へ共精神界ノ前金相切レ候趣ニ付別紙小為替願上候間何卒発送部ノ方へ御廻シ方御序ニ奉願上候

注1『精神界』第七卷第九号(明40・9)〈講話〉欄「涙痕記」

(曉鳥)で、「過ぎし一夏中に田舎に於て受けたる種々の警策を概括すれば無常迅速の感想と、宗教は力也との実験に有之候。」として、多くの死者とその臨終のありさまなどを綴っている。

注2明40・10・6に第一回を開催した信仰座談会(以後毎日曜開催)。のち第一第三日曜を仏教倶楽部の「精神講話」会、第二第四を浩々洞での「信仰座談」会にあてたりもした。

注3『日記』(明40・10・6)に「宮沢直治、恒治、磯吉の三人来。『我が信念』を輪読し、末節講ず。種々に信を語る。友遠方より来たる亦楽しからず乎の感あり。」とあり、この日政次郎に葉書が出されている。

補注『日記』(明40・10・21)発信欄に、「『社会新聞』高橋、宮政。」との記事あり。

『社会新聞』(明40・6・2〜44・8・3まで確認)日本社会党の結社禁止後、幸徳秋水らの「直接行動派」に対する片山潜らの「議会政策派」の機関紙として刊行。当初、片山・西川光二郎主筆で週刊。41・5より月刊(渡辺・塩田編『日本社会主義文献解説』)。

十五 十月二十九日 東京府下北豊島郡巢鴨村九七九 浩々洞

ニテ 曉鳥敏様 至急 陸中国花巻川口町 宮沢政次郎
封書 書留便 巻紙 筆

日増秋深ク相成申候

慈光之下御身御壮健ニ被為在候哉 折角御自愛之程奉祈上候

当月ハ是非上京親敷拝顔之上種々御厚教ヲモ仰申度存居候所凡夫之予期ハ空事ニテ来月ニ延期スル事ニ致候

誠ニ私共ノ愚痴蒙昧ナル毎日々々无慚无愧ノ日暮ラシ仕リ何一ツ報恩行ノ勤マラヌ事我ナガラ愛想ノ尽キ候程憫レムベキ次第ニ有之候 上京来月ニ入り御在洞ノ日ニ逢ハザル様ノ事アラバ遺憾至極ト存居候

諸本日誠ニ御恥カシキ次第ニ候ヘ共 田舎土産ノ心得ニテ金参円ニ小為替御送付申上候間伝道ニ勞セラル御身心ヲ養フノ一端トモ相成候ハゞ光荣之至リ奉存候^{注1}

尚外ニ御迷惑ナガラ金参円也同封ニテ願上候間近刊ノ書ニテ小生ニ読メソーナルモノ御見込ニテ撰択御送り被下度奉願上候^{注2} 尤も郵税モ其内ヨリ御支弁被下度候先ハ右御願旁々 時節柄折角御自愛奉祈上候

草々

十月二十九日

无慚无愧ノ

金蓮ヨリ

非无先生

御座下

注1『日記』「十月日用帳欄」三十日の項に「宮沢政次郎贈三、〇〇」と、また『精神界』第七卷第十一号(11月号)

〈報道〉欄「東京たより」中に「陸奥の小田島氏より林檎を、陸中の宮沢氏より御志を」云々という寄贈御礼の記事がある。

注2 『日記』(明40・10・31)に「午後、本郷に宮沢政次郎依頼の書を求む。『回光録』『沈思録』『エビクテタスの教訓』『親鸞聖人』『英雄崇拝論』『百喻経』、之に式文三十部加へて送る。」とある。『病間録』第二篇「回光録」(綱島梁川著、金尾文淵堂、明40・4刊)、『沈思録』(浩々洞同人著、金尾文淵堂、明40・6刊)、『エビクテタスの教訓』(稲葉昌丸訳、浩々洞、明37・5刊)『親鸞聖人』(福井了雄著、法蔵館、明34・4再版)、『英雄崇拝論』(トマス・カーライル著・住谷天来訳、警醒社書店、明33・10刊)、『百喻経』(百、実は九十八、の喩話を集録した経。大衆の為の興味をひく話が多い。送られた書物は不明)。

十六 十一月十四日 加賀国石川郡松任在出城村 妙達寺 曉
鳥敏様 「住所記入なし」 葉書 筆

過般ハ温かき洞の一夜ニ終生の記憶ヲ胎して御厚意の深厚なるを奉感謝候

迂生ハ仙台ヲ経テ昨夜師ハ其前御帰寺被成候御事ト奉存候 袂ヲ南北ニ分チテ去来常ナキ娑婆界ニモ常住の世ニ値遇する約束の御親の下ニ結ハレ候私共ハ仕合之至極ニ奉存候

時下寒氣増リ候 日本海の風希クハ師の上ニ温かな

れ

花巻ノ茅屋ニ 金蓮生

注1 『精神界』第七卷第十二号(12月号)〈報道〉欄「東京たより」に、「先月五日例年の如く洞の報恩講を営み申候。同人、和田、曾我、曉鳥、原子及佐々木の外にては、月見、数藤の二氏及び当時来京中なりし盛岡の宮沢氏等参詣下され候。寄合ひ書き等にて一層の興を加へ、夜更くるまで相語り申候」また「同信の人と語る世間これにまさるの喜びはなく候。友あり遠方より来るまた楽しからずやの真味は唯宗教の友によりて初めて味はるべきものと存じ候、」などとあり、『日記』にも「宮沢、林檎を、数藤、ウハツフルをくださる。」「宮沢宿る。」(11・7)、「午前、宮沢と語る。真宗大学に案内す。午後、宮沢去る。」と記されている。

十七 十二月二十五日 東京府北豊島郡巢鴨村九七九 浩々洞
ニテ 曉鳥敏様 要用 陸中国花巻川口町 宮沢政治郎
封書 巻紙 筆

寒冷ニも御障りなく為道益々御精勵御事大慶之至奉賀上候

其後一向御無沙汰失礼申上候

御出京御在洞の御消息誌上にて拝誦 本月の社論ハ必定尊師の御筆と奉推候 念仏の道をして只欣求浄土の上に重きを置き現世に浄土を建立するの趣味を伝ふるに疎き

を難するの声聞へ候今日末輩に列する私共も不少警策を感申候 誠ニ言行不忠信表裏不相応の私共仰て慙謝の外辞なき次第に御座候 只せめてもの嗜ミニ御座候

毎々社会主義ノ新聞御惠贈ニ預リ難有奉謝上候 私ハ此種の人類の心に起ル不平の声を見る毎ニ他の事とハ存不申誠同情の思ヒヲ禁じ能ハぬ次第ニ御座候 性根悪き私共ハ常ニ極端なる羨望嫉悪等の念に満てる眼ヲ以て社会を見候時社会主義者ノ筆舌ヨリ以上の激烈なる感情を以て相對し不平凝テハ何辺ニソヲ訴フルヤモ斗ラレヌ言ヒ知ラヌ苦シキ感情ヲ起シ候ヒシ事ニ候

然ルニ今幸ヒニシテ心ノ一ツダニアルモノハ平等ノ覺位ニ至リ得ル確信ヲ抱キ候ヨリ曩日ノ苦悶ハ氷雪ノ如ク溶ケ候ヲ感ジ候へ共今尚先キニ私共ノ辿リシ苦シキ道ヲ歩ミ居ル人ニ對シ如何ニシテカ此醍醐ノ妙薬ヲ服セシメバヤノ念禁ズル能ハズ候 相對ノ不平等ヲ救ヒ得ルモノハ只絶対ノ大慈悲ヨリ外無之事ト存申候 御縁アラバ同主義ノ人々ニモ御接触有リテ大悲ノ德音ヲ御伝ヘアラン事千万希望スル処ニ御座候 取分ケ我國ノ如キ冷時ハ忘レタルモノヽ如ク熱時ハ只万物触ルヽモノ皆焼キ尽サン様ノ激烈ノ情性ヲ有スル人民ニハ今ヨリシテ識者ノ憂フベキ大問題ト奉存候 是等コソ全ク地獄ノ猛火化シテ清涼ノ風トナルノ金言ヲ實現スルモノト存候

昨日ノ新聞紙ニ法科大学ニ工場法製定ノ事ニテ法学者連

ト実業家側ヨリハ渋沢男ヤ添田氏ノ舌戦有之近頃面白キ

対血ト存申候

就中渋沢氏ノ言ニ事業道ノ王道ノ道ヲ以テ望マ

バ富者ハ富者ナガラ貧者ハ貧者ナガラ共ニ社会進歩ノ道

ニ貢献スルノヲ得ベシ云々トハ先ヅ自己ノ立脚地トシテ

充分立派ニ言ヒタル積リナランモ如何セン事実ハ自己先

ヅ王道ヲ踏ミ外シ常ニ奇道ヲ以テ富ヲ造ラントスルノ事実

アルヲ思ヘバ世ニ立チテ言行一致其一言ヲ重カラシムル

ノ如何ニ難キカヲ想察被致候 所詮人間ノ足場ニ立チテ

貧富ノ不平均ヲ救済セン等ハ架空ノ論ニ過ギ不申存候

假令今日世界人類ノ所有ヲ一時ニ平均スルモ十日ノ後

一年ノ後忽チ偉大ナル不平等ヲ起シ来ルハ当然ニ御座候

畢竟仏ノ大慈悲ノ御心独リ此不平等ヲ救済シ得テ過不及

皆其処ヲ得テ其現在ヲ樂シム境ニ至ル次第ニ奉存候

田舎ハ明日ヨリ報恩講ノ節ニ入り申候 本日ハ久シ振リ

ニ雪ノ上ニ雨降り手隙キニ任セテ蕪雜ノ言書列ネ申候御

一笑被下度候

先ハ右御無沙汰御詫旁時下為道益々御愛重アラント幾重

ニモ念上候也

十二月廿五日昼

非無先生

御座下

金蓮生

佐々木先生ヤ多田先生ニモ御面会被下候ハゞ御無沙汰申

注1『精神界』第七卷第十二号(12月号)〈精神界〉欄「清新なる信念・倦怠・至善の一・至善の二・自他の人格」で、特に冒頭は、教えられた造花的信念に対して生花の生命を述べ、信仰の精神・信念の固定化がまねく衰弱に警告を発したものだ。曰く「仏教に入り、信念を味ふ者往々にして意気を消沈し、老衰者の如く、或者は世を超脱したる者の如くに粧ひ、或者は頑迷にすましこむあり、これ蓋し生花的の信念を味はずして、造花的信条に拘束せられたる結果ならんのみ。」「仏教は死の道にあらずして、死の道にある者に生の道を教うる也。念仏は悲みの道にあらずして、悲みにある者に歓喜の道を教うる也。人生其者は悲哀也、無常也、されど如来によれる信者は此間にありて歓喜あり、希望あり、勇氣あり。」「我等の仏教は歓喜の道也。満足の道也。我等の念仏は希望也、進取也、我等の信念は光也、力也。我等は此道による時、我等は如来の前に立ちて永遠の赤子たる也。我等は老いたる人にあらずして、永遠の未来を有する若き幼き赤子也。」「かくて我等は世に生きて、同一事を繰返すといふ念なく、常に新らしき風光に接し行くが如くにして、従ひて嫌厭の念なく、倦怠の念萌さず、日々与へられたる職に事へ、業に励み、春雨に延び行く木の芽の如くいそ／＼とて生氣ある活動を為し得べき也。仏教信者の標本は決して神経質の沈鬱なる念仏者にあらずして、天空海濶、公明正

大、堂々として屈せず倦まず、念仏に希望と精力を味ふ底の人ならざるべからず。」「(圈点省略)

注2 渋沢栄一(天保11₁₈₄₀・2・13₁₈₄₀〜昭6・11・11)実業家。日本初の株式会社である商法会所を設立し、大蔵官僚として活躍の後は実業に専念し、第一国立銀行、王子製紙、東京瓦斯などの設立や、商工会議所の組織などに携わった。

注3 財政経済学者添田壽一(元治元₁₈₆₄・8・15₁₈₆₄〜昭4・7・4)か。日本興業銀行などを創設。

補注『日記』(明40・12・21)に「午前、宮沢磯吉来。携へて真大図書館に行く。午後、宮沢と語る。夜亦同じ。同人宿る。」とある。

明治四十一年

十八 一月一日(一月元旦)東京府北豊島郡巢鴨村九七九 浩

々洞 暁鳥敏様 陸中花巻 宮沢政治郎 葉書 筆

謹賀新年

唱名声裡春ヲ迎へ涅槃ノ靈境又一歳ノ近キヲ加へ申候
御策励ノ下希クハ慙恨少ナキ日送り仕度候

明治四十一年一月元旦

十九 一月九日 東京市巢鴨村九七九 浩々洞にて 曉鳥非無

先生 宮沢磯吉氏托^{注1} 陸中花巻川口町 宮沢政治郎 封書
卷紙 筆

寒威酷烈ニ御座候処益々御清健為法御尽瘁御事大慶之至
奉存候

陳者毎々新刊御惠贈被成下御厚情千万奉鳴謝候^{注2} 尊地只
今ハ氣候如何ニ御座候哉 下地辺ハ寒威実ニ料峭積雪ハ
平均二三尺寒冷ハ華氏ノ十五六度迄有之筆硯も氷リ身体
モ弱キ私共ニハ大ナル圧迫ヲ感ジ申候 老人小兒ヤ病人
ニハ尚一層困難之次第ト存候

さレドかゝる処ニモ恩寵の大ナルヲ感謝スル外無之候ハ
冬季ノ恩寵トシテハ物皆静カニシテ夜ハ長シ 心アレバ
静思黙想ニ適スル事 防寒ノ設備サヘアレバ不思議ニ人
体ノ健康ナル事 魚鳥ノ豊富ナル事 橈ニヨル運輸ニ便
ヨキ事等沢山有之候 慈悲広大ナル如來ハ決シテ一方ニ
奪フ時ハ一方ニハ与ヘタマフ善巧ヲ有シタマフヲ感謝ス
ルヨリ外無之次第ニ御座候

本日磯吉氏上京との事ニ至テ龜末の物なから手作の漬物
差上候間御笑留被下候ハ幸甚至極ニ御座候
目下下地ハ陰曆の節季ニ際シ居候ニ付未だ春の景色ハ無
之候 私モ旧正月頃ニハ一寸ナリ上京致度存居候 其節
ハ御在洞ナレバ是非拝顔仕度存居候

先ハ取急御礼旁申上度迄

一月九日夜

草々

非無先生

御座下

注1 本文にもあるように、上京する義弟宮沢磯吉に托した手
紙。

注2 『日記』(明41・1・2) 発信欄に、政次郎に新刊の『秀
存語録』(佐々木月樵編、浩々洞出版部、明40・12刊)を
送ったことが記されている。

二十 三月一日 加賀国石川郡出城村^(マコ) 妙達寺 曉鳥敏様 親

展 陸中国花巻川口町 宮沢生 封書 卷紙 色鉛筆

寒氣中々難去御座候 御尊体御恙モ無之御消光被遊候哉
無慙の私モ御蔭様にて無事日暮らし罷在候 御休神被下
度御願申上候 其後折々御消息被下候ニモ不拘一向御無
沙汰のミ申上居候段解怠放慢我なから愛想の尽き候程に
て新年來諸方総て御無沙汰勝に御座候 御宥恕是祈候
過日御贈り被下候地獄太夫や沢庵様の御法語ハ早速高橋
兄にも転送仕候 同兄よりも幼時より耳馴れの法語なか
ら知ると行とハ天壤の差にて日暮しの我々にハ今更地獄
太夫に対しても牽丸のあるがなまじ以面伏であると言ふ
意味の御書面参候 如何ニ私の執着深く候かハ日々の所

化一として罪ならぬなく又それを改めて少しにても善きに転ずる事かよき事と思考せぬ次第にもあらねど忽ち又妄雲の覆ふ処となりてハ元の空阿弥一向水に画ける同様の心底に候 所詮ハ久遠の迷習により三毒に酔ひ倒れたるが今の身に候 折々呼び醒まさるゝ御声に朦朧の困眼を磨するが日々の境涯に御座候 併し又酔ひの尚醒めぬまゝ醒めたる分際として涅槃の夕煩惱の雲速かに晴れ法性の覺月を仰く仕合ハ又格別に御座候 昨夜も磐城の老同行鈴木力□老人一論せられ世に滅度の一益を仰く行者ハ無数にあれど正定聚^{注1}の日々の日暮らしに御恩を感じる者ハ少なしとの御話にも私も大ニ格醒^{マツ}を受け申候 か程喜べるべき身分に喜ふを知らず明暮れ過大の欲望に身心安からぬ思ひある事誠ニ六ヶ敷心底に候 何卒御情を以て此難化の者に適當の薬を御恵ミ被下度候

尚過般の精神界にハ人生々活の二方面御指南に預り難有文面白く拝読仕候^{注2}

併しなから同行寄合にも申談候 私共にハ迎も乞食式乞食の生活ハ出来不申極上等の処にて盜賊式(請求式)乞食より外出来不申到底与へられるゝ儘の赤子の生活ハ出来申さぬ事と相見へ候 天分低き次第もあるならんか到し方なき罪の者ニ御座候

併し又思ハぬ悲喜の境涯に於て知らず／＼口を衝て出る御称名の我れなから尊く御座候 昨夜も夜十二時過迄話

し裏に出れハ雪チラ／＼北方の天赤々と火災のあるらん様ニ鈴木老人口を衝て可愛や可愛や火事があるそうなど聞く身も感に打たれバ何ハあれ私共の恋情ハ一切念仏ニ御座候も我れながら難有奉存候 先ハ久々御無沙汰御詫旁々 まだ／＼奥東の山河ハ氷り居候 筆氷りていやに候まゝ鉛筆にて認め候 御免被下度候 余ハ後便ニ又可申上候

三月一日の昼

草々

金蓮生

非無先生

御座下

東京へハ何時頃御立出ニ御座候哉 御序もあらバ又御令室様御病氣との御事寒さの時節大切ニ被遊候様奉祈上候

注1 必ず仏となるべく決定されている聖者。浄土真宗では「阿弥陀仏に救われて、正しく仏になると定まった人びとをいう。すなわち第十八願に誓われ、他力念仏を信ずる人。」(中村編『仏教語大辞典』)

注2 『精神界』第八卷第二号(2月号)〈精神界〉欄の「生活上に於ける盜賊式と乞食式」、曰く、「自己の力によりて衣食すと思考する者は、取りて衣食すと思考する者也、故に此人は盜賊式の生活を為しつゝある人也。自己の力

を待まず他人の恩恵によりて衣食すと思考する者は、貰ふて衣食すと思考しつゝある者也。故に此の人は乞食式生活を為しつゝある人也。」「自己を先とすれば盜賊式となり、他を先とすれば乞食式となる。自力奮闘主義は盜賊式也、他力安住主義は乞食式也。」「仏陀の教へ給へる乞食式の生活は、感謝的生活也。酬恩的生活也。食を得んが為めに働く生活にあらずして、食を与へられたる恩恵に報ひんが為めに働く生活也。報酬を前に望む生活にあらずして、已に恩恵を得て報酬するの生活也。」「報恩主義の生活は世の実相に徹したる生活也、盜賊式生活は世の至誠に触れざる生活也。至誠の活動の世を動かし、虚偽の活動の根底より世を動かすに足らざるや論なき也。今の世の人、多くは忘恩の妄情によりて積極的活動を云為す、誤れるも甚しからずや。今の世に二宮尊徳翁の報徳主義を説く人少からず、されども彼等は真に報徳主義の乞食式生活たるの意義を了得しつゝあるや如何。我等は報徳主義をも盜賊式に解釈せんとしつゝある、今の所謂積極論者の浮虚なるブランド的奮闘を憐まずんばあらざる也。」「(圈点省略)

二十一 四月二日 東京市北豊島郡巢鴨村九七九 浩々洞 曉
鳥敏様 平安 陸中国花巻川口町 宮沢政治郎 封書 卷
紙 筆

寒さまだ／＼強く御座候 下地ハ尚雪三四尺も有之候

御光之下御恙モ無く御消光被遊候哉 先頃ハ誌上御令室様御母儀様先後御勝れ遊バさず候由拝承御心痛モさこそと御察し申上候 目下ハ格別の御事モ無之候哉 余寒ノ折柄一層御大切ニ被遊候様祈入申上候

宿縁と申しなから愚病蒙昧の私共不思議ト御名を念ずる幸ひを得てそを唱へ候とき不思議にも遠近の知己皆一処に集まり候を感じ候 過日モ師と食卓を共にせしを夢ミ申候 御名と共に昼夜淋しからず候事御恩に御座候 (此処迄十余日前ニ認メ其儘ニ致置キ候 怠慢ハ総テ此程度ニ御座候 御憫察被下度候)

右迄加賀御滞在中差上申度認掛申候処昨日社会新聞被下東京御在洞と奉存候 氣候ハ漸ク暖カニ相成リ雪モ最早無之相成候 誠や凡夫の計らひにハ十余日前迄ハ何時消るやら測られぬ程の多量ニ候へしも時節到来すれバ扱も無造作のものニ御座候 如来の御慈悲我等の罪体を照すとき又如此と御座候

分厘時を違へぬ天地の大御心に対して懈怠放逸の者只慙謝の至リニ御座候

師初め御在洞各位御健勝ニ御座候や

常なき世の習ひハ又岩崎長者をして白玉楼の人たらしめ候様ニ御座候^注 誠ニ死して何物が残るらん 哀れの事ニ

御座候 常住の処も知らで徒らに不急の事に心力を傾け候人多き事情けなく感じ申候

御地花ハ何時頃開き候様ニ御座候哉 大命の下らバ一寸
なりと上京仕度存念ニ罷在候
先ハ右久々御無沙汰御詫旁申上候
敬具

四月二日

金蓮生

暁烏非無先生

御座下

佐々木先生其他御在洞各位様ニモ宜敷御伝声奉願上候

注1 岩崎弥之助、三月二十五日死亡。『精神界』第八卷四号へ報
道〳〵欄「東京だより」でも岩崎や学者、政治家らの物故
者に触れ「人生の死の前には学問も、黄金も、権力も共
に、何等の用にもたゝずといふことの好教訓を得たるこ
とに候。」と言つてさらに蓮如の御文を引用している。

補注『日記』(明41・4・3)発信欄に『御消息集』を「宮沢
政、同直次」等に送つた記事がある。

二十二 四月二十三日 東京府下北豊島郡巢鴨村九百七十九番

地 浩々洞ニテ 暁烏敏様 至急親展 陸中国花巻川口町

宮沢政治郎 封書 書留便 巻紙 筆

貴地惜しき春も名残と相成候はん 地上の望ミハ空頼ミ
ニ候 本月下旬迄にハ小生モ一寸なり上京久し振りに尊
師にも拝顔致し高教を乞はんと思ひ居りしに近来又小生

親屬に一家浮沈の境に臨めるより家政改革の要起り常ニ
関係致居り容易ニ暇を得難く加ふるに老親の強て抑留を
求むるあり尊師にも総に親を思ふの感近来殊ニ深しと御
述懐を拝誦し親心の尊きを思へバ暫時なりとも我儘の考
の出てたる事相済まぬ様被考今更なからは迄不孝ものゝ
親玉たるを感じ申候 何と言ふ愚痴の者に候か

尊師に対しても御在国中より御家族御病中にも今日ハ御見
舞申さん明日ハと思ひつゝ遂に其事が拝顔の際と迄延引
致居候 相済まぬと思ふ心の起りてよりも尚其決行に手
間取る事偏に久遠の迷習に邪魔せられ候ものと被存候
本日大悲の御引立により乍微少金五円別紙小為替に托し
送り上候間何卒時遅れ候へ共御見舞の印し又ハ覚仰の日
夕精神に勞せらるゝ御身を少しなりとも養ふ料たらバ光
栄至極ニ御座候^{注1}

尚時々御文書御恵ミ被下難有奉存候 枯渴の我等時々
御法雨に浴して辛ふじて人並の軌道を歩ミ居候 何の日
か心の欲する処を肆まゝにして距を^{ママ}超へざる境遇に到達
候はん 日々の日暮らし只々無慚無愧に候 誠ニ勿体も
なき事ニ御座候

先ハ久々御無沙汰御申訳旁々申上度迄 御光の下愈御健
勝のミ是祈候

四月二十三日

政治郎

暁烏先生

尊下

御在洞諸賢別て佐々木先生ニモ宜敷御伝声奉願上候

注1『日記』(明41)「金銭出納録欄」四月二十八日の項に「宮沢政次郎見舞金 五、〇〇」とある。この日の『日記』には「宮沢、安藤二氏へ長文を認む。」とあり、また、新聞間もない『安心座談』(佐々木月樵著、無我山房、明41・4刊)六部も送られた。

補注『日記』(4・27)に、午前中に病院に行き、その「帰途、梅津子を訪うて種々事情をきく。断乎として真面目の所置をとる方可然など語る。」との記事がある。

二十三 五月二日 東京府下北豊島郡単嶋村九七九 浩々洞
 暁鳥敏様 要用 陸中国花巻川口町 宮沢政治郎 封書
 巻紙 筆

二十八日御認メ御状到着拝見仕候

承れバ御不快之為め御療治中にて被為入候趣何卒専念御注意一日モ速かに御恢復あらん事のミ祈上候 且朝夕ハ寒さも相応に時候も不順勝故一入御愛養の程奉希上候
 弱き身の娑婆逗留中ハ一年を送るも容易の辛苦にハ無之御座候 是れ物しふとき身に付属せる重障にして同時に又是によりて浄土の門を叩く恩寵と被存申候 私も戦役

前後の身体工合にては逆も今日頃迄の生存も覚束なく存じ愈々無為にして此世を辞せんかの間進退窮する処忽ち一道の御光に接し初めて究竟の安慰を得申し候
 「約七百字省略」

世の紛争ハ多く犠牲的精神なき我儘に出で其我儘ニ虚栄と女と結付く時其処に如何なる大家も又国家も衰亡するの理ありと存じ申候 中心我儘に満てる私共慄然として恐れ端心制意の仏誠を少しなりとも服膺して一世を過ち少なく送りたきものと存居申候

先ハ右御病氣御見舞旁々

御光の下益々御愛養是祈候

草々

五月二日

政治郎

暁鳥先生

二十四 六月八日 ^{注1} 東京府北豊島郡単嶋村九七九 浩々洞
 暁鳥敏先生 陸中花巻 ^{注2} 宮沢政治郎 葉書 ペン

拝啓

過般滞京中参上ノ節ハ種々御懇情ニ預リ候事奉深謝候
 少々不快ニ有之候為メ充分ノ時間にて御教ヲ受ル能ハザルハ遺憾と存候へ共次回ノ御会合ニ万事ヲ譲リ可申上候

昨日午前無事帰宅仕候ニ付右御礼旁申上度如此御座候

四十一年六月八日

草々

佐々木様及加藤隈部諸賢ニモ何卒宜敷御伝声奉願上候

注1消印では明瞭に二日とある。差出人の何らかの間違いであろう。

注2『精神界』第八巻六号(6月号)「東京だより」に、五月の「十九日には、小田島五郎氏が遙に陸奥の浄法寺より、宮沢政治郎氏が陸中の花巻より来らるゝありて、洞の兄弟共に清奥を与へられ候。」とある。政次郎が訪れたのは三十日、『日記』(5・30)に「午前、花巻の宮沢政次郎氏来訪。友あり遠方より来たるの悦びあり。種々に語り合ふ。中飯を共にす。牛肉の罐づめを貰ふ。二時頃去る。」とある。

注3加藤—加藤智学。隈部—隈部慈明。

二十五 六月六日 東京府下北豊島郡巢鴨村九七九 浩々洞

暁鳥敏様 至急 陸中国花巻川口町 宮沢政治郎 封書

巻紙 ペン

貴地日増暑気強ク相成候ハン

帰宅後碌々御挨拶モ不申上失礼申上候段御宥恕被下度候
御伺申上候節ハ腹工合面白カラズ諸賢ノ快談ヲ充分ニ伺
フヲ得ザリシヲ残念ニ御座候

胃腸ノ診察ハ左程相違モ無之矢張慢性ノ者ハ治療モ持久
タルベシト存候

昨日又御来信ニヨレバ貴師肺部異状有之候由^{注1}不少不安ト
痛愁ノ思ヒニ打タレ候 御本人ノ貴師ガ自若タルニ引代
ヘ御老親ヤ御令閨ノ心情ヲ御察シ申上候時ハ真ニ同情ノ
外無之候 肉アル間ハ苦悩モ免カレ難キ人間ノ常ニ存候
常住ノ生命ヲ獲得シテ大安住セラレシ御身ニハ去来平然
タルモノニハ有之候ナランモシカモ凡情ヨリスレバ普通
ニ肉体ノ破壊ヲ宜スル底ノ病氣アリト聞ク時ハ聖者ナラ
ヌ我々共ニハ一時ノ恐レト不安ハ慥カニ有之候ナラント
存候 サレド大ナル安住ヲ獲タル仕合ニハ恐レモ悩ミモ
幸ニ一時ニ止マリ冷静ニ又為スベキ事ニ從ヒ得ル事ト奉
存候 弱キ身ヲ持テル私共モ屢々経験有之腸結核ニハア
ラズヤ脊髄異状ニハアラズヤ呼吸器異状アルニアラズヤ
ト思惟スルトキ言ヒ知ラヌ不安ト惜愕トヲ感ジ候ヘ共幸
ヒニモ常住ノ安着点ヲ知リテヨリ其恐レハ暫時ニ止マル
事ト相成申候

貴師今回ノ事モ推察スルニ兼テヨリ若シヤ呼吸器異状アル
ニアラズヤト常ニ御思惟ナサレ居候事ガ愈々シカク異
状アリト聞クモ我々ノ如ク非常ノ驚異ヲ御感ジ候事ハ
万々無之御事ト存候ヘ共然レトモ矢張り肉体アル間ハ我
レニ愛惜アルハ常ノ情ニ御座候 且ツハ又如来御用物タ
ル御身ニハ病氣アリテヨリ又一層御使命ノ改マルヲモ有

之ナラント存候 茲ニハ只凡情ニヨリ存付候次第一二養病ノ御参考ニ供シ申候 元ヨリ御一笑ニモ価ヒセヌナラシモ万一取ル処アラバ幸甚ノ至リニ御座候

一身体ヲ中心トシテ日々ノ行為ハ商業式ニ言ヘバ収入何程減損何程ト計算ヲ立テ候上差引減損ノ収入ニ勝チタルガ病ヒト申ナラント存候 茲ニ御勧告仕度ハ思慮ノ儉約ニ御座候 我々目前ニ見ル処ニモ思慮ナク浪費スル家ハ破産ノ運命ヲ免レズ候 休養ニヨリテ収入ヲ造リ節約ニヨリテ浪費ヲ節シ漸次収入ヲシテ減損ニ勝レシムルガ健全状態ナラント存候 カク言フ時ハ律法的ト御叱モアラシガ慈雲尊者ノ十善法語中顔回ノ賢ヲ以テ不幸短命ナリシ等必ズ徳ニ欠ル処アルガ為メ云々ノ言アリシト存候 慥カニ此言味^(ママ)フベキモノト存候 病ヒヲ不幸ト言フハ大抵ノ人ノ言フ事ナレド其招^(ママ)ギタル原因ニ立入レバ慥カニ徳ノ円カナラズシテ肆^(ママ)マムニ減損ヲ招キタル因ナクンバアラズト存候 不謹慎ナル私共ハ此等ノ事ニ関シテハ常ニ恐懼我身ノ不甲斐ナキヲ嘆シ万一斗リモ嗜ミタキモノト心掛居候

其他ノ藥物ヤ空氣ヤ食物ヤアラユル知識ハ万一ニモ御遺漏ナキ事ト存ジ茲ニハ只思慮ノ節約テフ事御実行相成候様御勧メ申上候

尚モ一ツ申上度ハ過日東京ニテ感ジ候事ハ矢張り是レ又商業式ニ御座候 物多ケレバ尊カラズ 若シ黄金ヲシ

テ鉄以上ノ産額ナラシメバ或ハ鉄以上ノ価値ヲ保ツ六カシカラント存候 現今有為ノ材都会ニ堆積シテ田舎ニハ非常ニ空乏ヲ告ゲ居候現状ト相見ヘ申候 尊マレザル都会ニ生活難ヲ訴ヘツムアランヨリ比較的ニ余裕アル田舎ニ根深ク培養ニ従事セラレント何程經濟式ニ叶フヤモ知ルベカラズト存候 貴師ノ今後モ遠ク開祖上人が逆縁ヲ恩寵トシテ根底深ク北国東国ニ植ヘラレシ如ク御病氣ノ逆縁ヲ一転機トシテ深ク田舎ノ間ニ為スベキ御事ノアルナラント愚考仕候

先ハ右思ヒ付キ候蕪言ヲ陳ジ候

時節変リニモ有之折角御自重御自愛如来ノ御用物御預^{あつか}リ物ヲ現状保存ハ勿論御用ノアル間ハヨリ以上人間トシテ出来ル丈御大切ニ御保護成サレ候事御法守護ノ上ヨリ切ニ望ム処ニ御座候

頓首

六月六日

店頭散乱の間にて

政治郎拝

非無先生

尊下

御在洞各位様ニ宜敷御伝声奉願上候

注1『日記』(明41・5・31)に「午前、過日來の胸痛苦しければ、佐々木政吉氏の診察を受く。左肺下部、右肺上部

に獨音をきく、肺病也と宣告せらる。診察室を出でて藥

を待つ内に何となく涙ぐまれぬ。死を思ひ、母を思ひ、妻を思ひ、名を思ひ、事業の中止を思ひ、運命を思ひ、如来を思ひ、称名に來たりて心平也。病院を出でて縁したる御茶の水橋を過ぐる時、雨雲低し。精神に一種の解脱を感じり。」とある。

二十六 七月五日 東京府下北豊島郡巢鴨村九七九 浩々洞

暁鳥敏様 陸中国花巻川口町 宮沢生 封書 巻紙 筆

梅雨氣候尚勝レ不申候

其後存ジナガラ御無沙汰申上居候 御宥恕被下度候

今回仏天加護ノ下数旬ノ御旅行^{注1}滞リナク御帰京有之由大慶不過之候

度々聖人御旧跡ヨリ御文被下居ナガラ芳跡ニ御供スル心地致シサリナガラ又氣候風土ノ変リシ地ニ何カ御身体ニ御異状ナキヤト御案ジ申居候 御旧跡ノ御巡回ニテ定メテ御感想モ繁ク哥袋モ重クナラレ候御事ト奉存候

東京ハ是ヨリ暑ク相成リ可申弥々御撰生大切ニ奉祈上候何卒貴師一人ノ御身体ト覚サズ如来ノ御預リ物別シテハ同行指導ノ為メ尊キ共有物ノ積リニテ御愛惜奉願上候

当地辺モ毎々陰鬱ニ少雨降り実ニ年中ノ面白カラヌ時節

ニ候 私共愚痴ノ者ノ胸中ハ常ニ又此頃ノ空合ノ如クニ

御座候 サレド難有キ事ニハ愈々ドン底ニ迄押詰候ヘバ闇ニハアラデ輝ク光明ノ我が痴暗ヲ破リテ其真想ノ穢ナ

キヲ覚知セシメ覚ヘズ懺悔ノ唱名モロニ出デ湧然トシテ感謝ノ念モ起リ申候 常ニハ此光明ニ蓋ヲシテ成丈隠サントスルガ二六時中我等ノ仕事ニ御座候 随分甘ククルメ終セントスルガ目的ト候ヘ共遂ニ勝ち兼候ハ光明ノ力用ニ御座候

陸奥ノ勘太郎様モ近頃ハ頓ト無^(ママ)不沙汰ニ御座候 其他諸道友モ皆氣候ニカブレテカクスブリ勝ニ相見ヘ申候 此辺ノ如キ処ニハ折々迅雷一過ノ引立策モ專要ト存候

日々ノ新紙尚生活ニ負ケ候人ノ殺傷沙汰ヤ忌ハシキ事絶ヘ不申候 善人ノ感化ノ弱キヲ示シテ如来ノ子タルモノ一層ノ奮励ヲ要セズンバアラズト存候

先ハ久敷御無沙汰ノ御詫旁御伺申上度迄

七月五日

草々敬具

金蓮生

暁鳥非无先生

御座下

在洞諸師ニモ宜敷御伝声奉願上候

尚乍末筆別て佐々木先生御愛児御往生被為有候趣^{注2}誌上拝読取分御弔詞モ不申上失礼仕居候 何程御覚悟ノ着^(ママ)キ人ニモ骨肉の御別離ハ又格別ト奉存候間何卒貴師ヨリ厚ク御弔詞申上被下候様取分御願申上候

注1『精神界』第八卷第七号(7月号)「東京たより」によれば、六月「十五日発京、信州上田、越後高田、中の島三条、吉田、間瀬、新潟、新発田、柏崎、北条、松崎、国分」をめぐって七月六日に帰洞。

注2『精神界』第七卷第六号(6月号)「東京だより」冒頭に、六月六日に佐々木の幼児勝子危篤の電報にて、彼の帰着の前に死去との記事がある。

二十七 八月六日 加賀国石川郡出城村 妙達寺ニテ 曉烏敏
先生 侍史 陸中国花巻川口町 宮沢政治郎 葉書 ペン

炎熱近年になき厳しき事に御座候 其後久しく御伺も不仕候処貴師気候にも御障りなく御消光被遊候哉御伺申上候
下地も土用来珍らしく好天気打続き久しき陰鬱続を案じたる農業も余程見直し申候 幸に道友にも格別の異条ハ^(ママ)無之候間御安意被成下度候 されど年毎に増し来る生活場裡の荒波ハ中々に道友相会の期を与へられ不申候 昨日一泊の予定にて大沢の夏期講話会を見舞候処講師ハ^注齊藤唯信師にして其聴講者の少なき僅に町内の人々を合して三十以下の少数に有之候 私共始め不急の事をのミ争ふもの多き世に候 師一層の御自愛を奉祈候 草々

注1「精神界」第八卷第八号(明41・8)「東京だより」に、

「齊藤唯信師は、本月は陸中花巻、大沢の講習会に、出演せらるゝ由に候。」と報じられている。

齊藤唯信(元治元¹⁸⁶⁴・12・18〜昭32・12・22)真宗大谷派僧侶。真宗大学教授、大谷大学教授などをつとめる。著書に『仏教学概論』(森江書店、明40・4刊)、『信仰と修養』(浩々洞、明40・5刊)、『仏教倫理』(無我山房、明43・8刊)など。

二十八 八月二十五日 加賀国石川郡出城村 妙達寺 曉烏敏
様 平安 陸中国花巻川口町 宮沢政治郎 封書 便箋
ペン

久しく御伺も不申上御無沙汰ニ打過申候 暑中御障リモ無之御凌ギ被遊候哉 念頭常ニ相済マスト思ヒナガラ御無沙汰申居候 御病気の方別段御変リモ無ク御暮シ被遊候哉 御法器折角御養護専一ニ奉願上候
私モ御蔭ニテ当夏ハ胃腸例年程悩マズ先づ平穩に暮し居候 御地気候ハ如何御座候哉 当方ハ土用来三十余日照り続キ農作モ至極宜敷三十日中降雨僅カニ二三日ニ過キズ暑氣モ強ク候処一昨日ノ雷雨ヨリ急に冷氣と相成朝夕ハ袷着尚宜敷位ニ御座候 日中コソ少シク暑ク候モはや満目秋の気色と相成申候

是レヨリいよ／＼夏の眠りを醒して自然の警策を受ける事多からんと奉存候 懈怠放逸の日暮を営ミ居る殊にさる

感に打たれ候

当夏ハ貴師北越地方御巡回にて遠き宗祖御艱難の跡を御
 偲び被遊候御事なれば定て感慨の多く被為有候御事と奉
 拝察候 ぬく／＼家内に籠り居て暑を寒をかこつ私共無
 慙愧の日暮らし申すに辞なく御座候

いかにするもよからぬ私共の心中只々水に画ける如く浅
 間しき次第ニ御座候 年毎にきたなき心と執着の思ひ多
 く相成り候を覚へ候事如何之次第なるべきや御示し被
 遊度候 殊に知足安分の工夫と言ふ事私共にハ尤モ必要
 なる事と存しなから是れはた実感としてハ益々疎隔に傾
 き候様被存候事愈々我身のつまらぬ事被存候 何卒適切
 なる御工夫御示し被下度奉願上候

過日浄法寺の高橋兄と久し振りに逢ひ種々所感所聞を交
 換して半日の清縁を喜び申候 就て其節元祖上人の簡潔
 なる御化導を語られ候、生けらば念仏の功つもり死なば
 浄土に生れなるとてもかくても此身には思ひ煩ふ事そな
 き等又現世を過くべき様ハ念仏の申されん方にすくべし
 等何れも迷ひ深き私共にハ難有慈訓と拝し申候 思想界
 混乱の今日知る愈々多くして迷ふ愈々多き今元祖上人の
 一刀両断乱麻切る感の明白痛快なる大獅子吼こそ望まし
 く御座候 日々の新紙に非(常)業に人の多く死するに
 若し此簡潔なる如来の大音響き候ハ生死共に安からん
 にと計らひ心を起し居候 此間も当町随一の資産家の長子

三十八才なる人突然の胃癌に医者よりハ余名幾程もなし
 など伝へ承り候ニ付我身の露命ハ差置き若し宿縁モあ
 らばと清沢先生の著書等呈し置候 中々娑婆執着の強き
 人の御慈悲知らぬ程哀れふかきハなからんかと奉存候
 又是等分り切たる事柄ヲ日夕見聞して即今我身の上に驚
 かぬ愚痴驕慢の迷習いかに深きかを懺悔せられ折々世想
 の恐るべきを感じ候とき慈父の御袖に縋りつく思ひにて
 称名の申され候事も有之候

佐々木哲郎君も段々身体ハ宜敷御座候 只精神的覚醒の
 遅れ候ハ寧ろ不思議に御座候 病前御慈悲の何たるを味
 ひたる人にいつ迄か黒雲の覆ふ事か凡夫分り兼候事に候
 過日も近角師半日御来花の節に種々御話もせられ候様に
 御座候 耳近かに師友皆辞を尽すも只反応のなきにてい
 よいよ宿縁てふ事の味ハれ申し候

私共忘恩の者をして臆気ながらも御恩の万分一を感ぜし
 めて頂き候御盲ていかにも勿体なき御苦勞と奉存候 世
 に苦しむ人ハ皆妄恩ニよりにて苦し居る次第と存候 そ
 れに付ても難信の御法に疑ひなく信じ居る身ハ幸福の至
 極ニ御座候 其他ニ日々夜々起る愚痴煩惱の所作ハ此幸
 福に付随せる一種の趣味ある景物にハ無之候やと存居候
 先ハ暑中御伺旁々愈々為大法御身体御大切ニ被遊候様奉
 祈入候

敬具

八月二十五日昼

暁烏非無先生

御座下

金蓮生

注1 書簡二十六注1に同じ。

注2 近角常観(明3・4・24) 昭16・12・3) 真宗大谷派の僧侶。清沢満之らと共に宗門改革運動を起す。明治三十年に求道学舎を創設。著書に『信仰問題』(文明堂、明37・2刊)、『懺悔録』(森江書店・浅井文光堂、明38・6刊)、『親鸞聖人の信仰』(無我山房、明41・9刊)など。

二十九 十月十八日 東京府北豊島郡巢鴨村九七九 浩々洞

暁烏敏様 陸中花巻 宮沢政治郎 葉書 ペン

其後御無沙汰申上候 秋モ日増深く冷氣も相加候 仏天御加護の下御障リモ無ク御消光被遊候御事大慶之至奉賀上候

本日誌着御元氣にて各地御遊歴定テ面白き御事モ可有之と存じ候 又折ヲ得バ御面会仕度存居候

本日此便ト前後シテ^(ママ)菓物一包御贈呈申上候 何卒御在洞各位ト御頒チ御風味被下候様奉願上候

尚乍末筆佐々木様外各位ニモ宜敷御伝声被下度 時季初冬ニ移ルノ際特ニ御撰生御留意之程奉祈上候 敬具

十月十八日

注1 『精神界』第八巻第十号「東京たより」に、予定が報じ

られているが、九月二十三日出郷、敦賀、長浜に寄り帰洞。二十七日から十月十日にかけて山形地方(尾花沢、鶴岡、大山、新庄、山形、長井、上ノ山)へと旅した。

三十 十一月九日 加賀国石川郡出城村 ^(ママ) 妙達寺 暁烏敏様

陸中花巻 宮沢生 葉書 ペン

寒サ日増ニ強ク今朝ハ寒風ト共ニ少量ノ雪ヲ見候

御身体此寒サニ御変リモ無ク御消光被遊候哉 私モ過日御懇書并ニ御揮毫被下候節早速御挨拶申上度存居候処眼ヲ患フテ暫時書キ読ム事ニ遠カリ存シナガラ御無沙汰申上居候

東京御在住中ニ御面会出来兼ル節ハ御挨拶斗リモ申上度存居ながら遂其意ヲ果シ兼候事誠ニ无力之至ニ御座候近頃種々世ノ仕事ニ接触シテハ其都度ニ今更ナガラ我レノ无能力ニ呆レ果テ同時ニ如来威神ノ御力ヲ仰嘆シツム日暮ラシ罷在候

先ハ久々御無沙汰御挨拶旁 益々御法器御大切ニ奉念上候也

三十一 十一月二十七日 石川県加賀国石川郡出城村 ^(ママ) 妙達寺

暁烏敏様 平信 陸中国花巻川口町 宮沢政治郎 封書 卷紙 筆

日増寒氣ニ相成リ当地方ハ最早降雪モ数度有之過日ハ次

雪にて往来モ留る程の事も有之候 貴地ハ今如何ニ御座候哉 其後御無沙汰にのミ打過申候段御申解^{ママ}も無之次第御有免被下度 御身体寒さにも別段御障り等無之候哉 日々如何ニ御暮らし被遊候哉と念頭には往来しつゝ御慰問の筆も運び兼居候事恐縮之外無之候

誌上にハ御元氣にて御帰郷ありし様拝承候へ共貴地之氣^{注1}候ハ又京地とハ違ひ候事と奉存候間只□御愛護御健全にあらせられ候様奉念願候 当月も最早僅ニ相成り来月ハ又御来京之趣私モ当今頃ハ一寸なり上京之都合に候処人事ハ仲々思ふ様にも無之どうやら年内ハ出掛兼候哉とも存居候 夫れモ凡夫の思慮ニ候ヘバ又何とか相成可申かと存居候 何レニアリテモ御仏ノ慈懷ニ棲ム仕合者程心絃ノ共鳴スルハ無之手近キ咫尺ニアル親^{ママ}近骨肉ハ畏トモ靈界ノ天地ニハ如何ニモ懸隔ノ遙ナルヲ感ジ薄信ノ子独り寂寥ヲ感ズル時我レナガラ計ラヒノ浅間シキヲ覚ヘ候 万事宜敷キニ満チ足レル様為シタマハル御計ラヒニ常々不足ノミ申事勿体なく只愚痴の者其まゝ雲晴れぬ其まゝの御救ひを頼ミトスル斗リニ御座候

過日モ又御頒布被下候報恩行ノ御紀念道友ニ頒チ申候此段御礼申上候 如何ニモ薄福ノ者多キ故カ御法ノ声ニカアル発展モ仲々相見ヘ不申候間御健康ヲ弥ガ上ニ御勉メ被下候上当方ノ天地ヲモ御引立被下候様奉願上候 地方道友高橋勘太郎兄ハ仲々御面会之機少ナキヲ憾ト

致候 佐々木哲郎兄ハ青森県木造町と云フ処ニ教鞭ヲ取り居ラレ候由 其他地方ハ零々盛岡モ独り赤沢兄ノ堅忍持久セラルゝアリ 誰レノ話頭ニモ誠ニ殖ヘヌモノゝ例トシテ引カレ居候 全ク藥嫌ヒノ毒好ミガ私共ノ自性ニ御座候

此度ハ本山ニ異常ノ変改有之候事ト相見ヘ候^{注2} 宗門之為メ向後如何ノモノニ候哉 御序ニ御知ラセ被下度候 先ハ久々御無沙汰御詫旁申上度如此御座候

十一月二十七日

頓首

金蓮生

非无先生

御座下

注1『精神界』第八卷第十一号「東京たより」(十一月四日夕執筆)に、「暁鳥は病氣だん／＼よろしく、今夜出發京都に向ひ、二三日逗留の後郷に帰り来月の中旬帰洞の予定に候。」とある。

注2先きに『精神界』八月号の「東京だより」(八月七日午記)の中に、「一、大谷派本願寺の内局は、能淨院殿始め、此頃、上局の方々総辭職をなされ候。今後は、井沢勝什、土屋法潤、桑門志道、森野円盛等の諸師代つて立たるゝ由に候。信念の上に築かれたる本願寺は、事務のみの内局にては維持し得べくも候はず、何卒々々一日も早く信の内局を組織して、生命ある本願寺に光を添へられんこ

と、これのみが我等の願に御座候。」とあり、また、翌四十二年一月号（第九卷第一号）の「東京たより」には、「去る年末には、大谷派本願寺法主以下は南条師を伴ひて尾張三河近江越前加賀越中能登を巡化せられ、多くの人々に法縁を結び下されたる由に候。又各連枝方は各地に赴かれ、本山維持について、種々御苦心下さる様子に候。派内の耆宿の方々も亦それ／＼手を分ちて、諸国を巡教せられ候由、かく一派挙りて宗門の維持に尽悴せらるゝこと何よりうれしく候。」とある。本願寺財政問題がからんでいた。

明治四十二年

三十二 一月十一日 東京府北豊島郡巢鴨村九七九 浩々洞
 曉鳥敏様 至急 陸中国花巻川口町 宮沢政治郎 封書
 巻紙 筆

寒気仲々敵敷御座候処御障りもなく御迎歳被遊候哉 野
 生も御蔭様に御光の下御恩の懷に不相変無慙愧の日暮ら
 し致居候間乍憚御休神被下度奉願上候

此度ハ貴意に懸られ御肖像御惠贈被下正ニ拝受仕候 永
 く師を偲ぶの紀念として難有奉謝上候

新年ニ入り別段御身体及御境遇に御變動も無之候哉 野
 生等の眼に映る処ハ我も人も終歳役々誠に憫れむへき罪
 の日暮らしに御座候

中にも好事の耳目に入る事ハ少なく傷ましき愛欲名利の
 取り遣りのミに有之日夜不知々々其間に出没すればこそ
 是れか普通の人間の所作とも思へ一旦情縮静まり意識少
 しく明らかなるの時情々身辺幾多の事を回想すれば只浅
 間しさに慄ハるゝ斗りに御座候 されハこそ先賢の魔郷
 と喝破せられし事の尊き導きを感じ候 されどそこ迄気
 付きても矢張り愛欲名利捨る事もならぬ無智の徒ら者真
 実大慈大悲の御前降伏の兜を脱する外無之候 私共の称
 名ハかゝる一分自己の能力の不能なるを感ずるとき絞り
 出さるゝ御催促の称名に御座候 うら／＼御恩を喜ぶ御
 称名ハ何時になれば出来るやら分り兼ね申候
 貴師三月頃迄ハ御在洞ニ候や
 其御地ハ少しハ春めき候にや
 当地ハ筆硯も氷る零下十度以内の寒さにて正ニ陰惨の極
 に御座候
 先ハ久々御無沙汰御詫旁
 寒さに御負けなく益々御清勝に御励精被遊候事祈る処に
 御座候

草々

一月十一日

宮沢生

非無先生

御座下

補注『日記』(明42・2・5)に「花巻の宮沢政次郎氏よりま
るめろ五、水飴三、をめぐまる。雪の中よりの贈物なれ
どなさけの心はあたゝかし。たゞ御名をよびつゝ之をお
くり之をうくる。因縁の不可思議なることを思ふ。」とあ
る。この時暁鳥は郷里に在った。

補注『日記』(明42・4・14)に「留守中宮沢直治、恒治氏林
檣を持ちて来たり、増谷君来たりと。珍客に逢はれざ
りし、やゝ憾みあり。」とある(在洞)。同じく(4・16)、
「帰れば宮沢直治、恒治の二氏あり。」ともある。

三十三 六月八日 東京市小石川区大塚仲町二十八^{注1} 浩々洞ニ
テ 暁鳥敏様「差出人住所記入なし」 金蓮生 絵葉書 筆

先生御法事御滞りなく御光の下御勤まり御事と奉存候^{注2}
其後諸師御健康御宜敷御座候哉御伺申上候
時候梅雨ニ入る一入御愛護是祈候

草々

諸師ニ宜敷願上候

注1真宗中学校舎の売却と共に旧居が売られたのに伴い三
月二十九日に転居。暁鳥筆で『精神界』第九巻第四号に
「浩々洞移転の記」が掲載されている。

注2この年六月六日は清沢満之の七回忌であった。『精神界』
第九巻第四号に七回忌法事の告示がある。また第六号

「東京だより」では御礼、報告が載せられ、香資をうけ
た方々の芳名の中に、「宮沢政次郎、慈光婦人会、宮沢直
次」の文字が見える。

三十四 八月十日 加賀国石川郡出城村^(マツ) 妙達寺 暁鳥敏先生
陸中国稗貫郡西鉛にて 宮沢政治郎 封書 巻紙 筆

御承諾之御返事ハ

花巻に被下度候

慈光照護の下横着者の私も無事息災当地に静養罷在候
深重の御恩只々御礼之外無之候

其後ハ塵の巷に盲動して絶て御伺も不申失礼申居候 尊
師御恙も無く当夏御暮し被遊候哉

閑地にあつて初めて旧交の懐かしきを思ひ出す程之横着
者に御座候

精神界御所載佐渡行路之御所感赤裸々の処誠^{注1}に夏の姿に
て誠に嬉しき尊師の卒直なる面目に接し只何となく微笑
の出来候 定て私共の折々に尊師懐かしく思ふ如く寛き
尊師の御胸に時折我々の拙き面影も浮び候事ならんと何
となく面白く感居候

当年ハ夏期講習会の主催にて大沢に村上専精師^{注2}の原人論
を聞き本日にて三日に御座候 さしたる病にも当年ハ苦
しまぬ身数日の暇を此地に過し得る御恩を感居申候
此地に来てより漸く身も心も閑なるを得て初めて劉禹錫

とか思ひ居候支那の御叔父さんの所感と同意致候 登臨
 每逢好風景羨他天性少情人とハ矢張生きたる実感にて実
 に数ふれば四年の跡大沢の十日尊師と起臥せし日の追懷
 せられ候 就て此に致て御願致居候当春機因未熟にて御
 来遊無之遺憾を是非当秋ハ私共初々尊師を知る者の総て
 の渴望を満たし被下是非く御巡遊奉請上候 浄法寺の
 高橋氏も必御呼寄せ致し久しき久潤の情を叙し可申候
 茲に右不取敢御伺旁御無沙汰御詫迄申上候

草々

八月十日

金蓮生

暁鳥上人

御座下

反古同様の手紙御免被下度候

当地付近ハ今に三十日斗雨なく本日漸々少々降り候

願くハ今日此頃之田畑の如き枯渴の群生の上に甘露の法

雨を灑きたまへ

さなきだに下手なる手紙ハ子供等に邪魔せられて一層下

手に御座候

注1『精神界』第九卷第八号(八月号)は、「東京だより」に

「八月二十二日午後記了」とあるように遅れて刊行され
 ているので、前号七月号が該当するか。すると、「信濃河
 畔に於ける黙想」(末尾に「十七日朝六時只今佐渡に立
 つ」とある)を指すか。一、二行から二十行程までの断

章五十三の感想録である。例えば「予は修飾を好まず、
 赤裸々を愛す。されど自らは常に修飾を加へぬらしく、
 赤裸々らしく修飾しつゝある也。予は偽善者らしからぬ
 やうに見せかくる、偽善者以上の偽善者也。あさま
 しく。」「さあ一つ思ひきつて悪い事をしやうと思ふと
 できぬ事もある也。／悪い事をしてはならぬ、してはな
 らぬと思ふて居ながら、ついうと／＼と悪い事をする折
 もある也。／人はしばつたとてむやみに堅くなるもので
 もなく、放つた所がめつたに墮落しきるものでない。」
 「予は時々狂人のやうになることあり。まるで狂人のや
 うぢやなと思ひながら、その狂をどうする事のできぬ事
 あり。念仏しながら狂ふて行く也。念仏は狂ひたをれた
 時に抱き起して下さる母の腕である。」「このち、暁鳥は
 こういった感想体の断片集をしばしば掲載する。」「
 録」「雑語」といった標題だが、雑誌『汎濫』でも繰り返
 される。

注2 村上専精(喜永411 1851・4・1〜昭3・10・31)、真宗

大谷派の僧侶、仏教史学者、文博。明34・7金港堂刊の

『仏教統一論一編大綱論』(「第二編原理論」明36・4、

「第三編仏陀論」明38・1)のため、明44に復籍するま

で大谷派の籍を離脱。大正六年、東京帝大印度哲学科開

設とともに教授。のち大谷大学学長などを勤めた。著書

は『日本仏教史綱』(上、明31・9、下、明32・3、金港

堂刊)、『人生の行路』(明41・7、無我山房刊)。共編に

『明治維新神仏分離史料』(大5・3〜昭4・7、東方書

院刊)など。

注3正しくは三年。

三十五 八月二十六日 加賀国石川郡出城村 ^(ママ) 妙達寺 曉烏敏
先生 陸中国花巻川口町 宮沢政治郎 葉書 筆

残暑蔽敷御座候 其後御障りも無之御消光被遊候哉 諸
西鉛滞留中御伺申上候当秋御漫遊之件御都合如何可有候
哉 折角春以来ノ宿題ニモ有之成丈御都合被下御来遊奉願
上候 且時日御指定被下候へバ浄法寺へも早クヨリ通知
申度候間可成御差繰奉願上候
尚為念申上候ハ東北ノ紅葉ハ大抵十月初メ尤モ宜敷其盛
時ハ春花ノ及ハザル風趣ヲ呈シ候
右御伺申上度迄重テ申上候 草々

三十六 十一月八日 加賀国石川郡出城村北安田 明達寺 曉
烏敏様 平信 陸中国花巻川口町 宮沢政次郎 封書 巻
紙 筆

御帰国迄御無沙汰申上居候 御護の下御障り無く御消光
被遊候哉 ^{注1} 当地ハ一昨々夜雪降り候 紅葉爛班之中消へ
残る雪又美観たるを失ハす候
御来遊之節ハ久し振りに拝顔致し裕かに法雨に浴し候事
感謝之至りに御座候

報恩講御使用に御約束候百合ハ小生の手ニハ求め兼ね候

甚だ土産之趣意に添ハぬ不本意之至に候へ共今朝書留に
托し裏地式反呈上申上候 粗末の物に候へとも不悪御酌
量被下御用ゐる被下候ハ至極之至りに候

夕刻にハ東京御発にて恵空師語録御恵ミ被下難有御礼申
上候 貳百年前の徳者を透^(ママ)ふして恩知らずが御恩を知ら
して頂くの種と存じ永夜の伴侶を得たる事を喜び申候
昨夜伊藤直治君尋ね参られ花巻辺には御法話と御演説に
対する反響ある事を聞申候

各人異色の領解不信者にも又御縁となる事を念申候

御地氣候ハ如何ニ御座候哉 最早当地ハ冬籠りの仕度最
中に御座候 只年豊かなる評ありて却て農商の民に華色あ
る事遺憾に御座候 経世家の意を摧くべき問題ハ随分多々
有之様に御座候 今にして思ふに御恩を知らでハ一日
も安ん^(ママ)しで暮す事の出来ぬ私なると共に御恵ミの中に安
んぜずして自己本位の希求に生命を縮むる程悶く人ある
事気の毒に御座候
先ハ右御礼旁申上度如此御座候

草々

十一月八日

曉烏先生

御座下

政次郎 ^{注3}

慈光婦人会よりも宜敷御礼申上呉れとの事に御座候
御家族様方にも宜しく御願申上候

注1『精神界』第九卷第十一号(明42・11)「東京だより」に「曉烏は去る三十一日に盛岡より帰り、八日に京を立ちて郷里に入り候。」云々とある。

注2『精神界』第九卷第四号に「慧空師略伝」が掲載されている。平楽寺書店刊の『慧空語録』は大2・3刊。この頃無我山房版が刊行されたようである(未確認)。

注3本書簡以降、署名は全て「政次郎」となっている。

明治四十三年

三十七 五月二十二日 東京市小石川区大塚仲町二十八 浩々

洞ニテ 曉烏敏様 平信 陸中国花巻川口町 宮沢政次郎

封書 巻紙 筆

帰宅後御挨拶モ不申上御無沙汰致居候処昨日御懇ノ御紙面相達シ難有拝誦仕候

何ヨリモ皆々様御揃御壮健ノ御事大慶之至奉存候

私共モ御蔭様ニテ無事価ヒナキモノガ破格ノ御恩ノ中ニ

棲マシテ頂キ申候

田端ニテ御別レノ后^{注1}汽車ノ都合ニテ浅草ノ方面ニ御廻リ

被成候由当時ニ於テ相分り候ヘバ私モ半日ノ遊覧ニ御相

伴スル丁出来候モノヲト残り多ク存申候

私モ御別レノ后日曜ニモアリ半日ノ余暇ヲ散策ニ過サン

ト存ジ上野ノ山ニ上り候処格別見ルベキモナク又人出モ

少ナク暫時ニシテ下山浅草ニ参り公園池ノ端付近ニ活動

写真ヲ観申候 カクテ五時頃帰宿仕候

私ノ帰宅ハ(名古屋ヨリ十四日ニ帰東)十五日ニ御座候
帰来毎日陰鬱ナル天気ニ雨模様ニ有之候処彗星通過ノ為
メカ昨日ヨリ漸ク晴天ト相成リ申候

年一回田舎ヨリ東京ニ又都会ヨリ田舎ト明暗ノ路ヲ出入
スル様ノ考ニテ少シク冷ヤカニ現代ノ人心ノ模様ヲ觀察
候ヘバ誠ニ甚敷キ各人生活ノ苦惱ニヨリ足下ニ横ハル死
ノ問題ニモ痛切ニ考慮ヲ費ヤスノ暇ナキマデ鈍ニシビレ
タル状態ニアル様存候 教化ノ任ニアル先生方ノ御骨折
モ多大ノ御事ト奉存候

東京ノ氣候ハ如何ニ御座候哉 地方ハ藤及牡丹是ヨリナ
ラント存候 養蚕モ段々繁忙ニ相成リ可申候

本月末ニハ盛岡在住ノ高橋勘太郎氏ヲ御招ギシテ共ニ法
味ヲ楽シミ度存居候
先ハ御無沙汰御詫旁

五月二十二日

草々

宮沢政次郎

曉烏敏先生

御母儀様

御令室様

注1『日記』(明43・5・8)に「洞の座談に集る者、花巻の

宮沢政次郎氏外十四五名感話を為す。宮沢氏と中飯を共

にす。午後一時、母と妻と宮沢氏とにて大塚をたつ。宮沢氏は上野に向かひ、予等は長野に向かはんとて也。田端にて乗りかへといふ。待つ内に汽車停車せずして去る。夜の十時、上野発の汽車を待たざるべからずときく、失望す。心をかへて上野に行き、浅草別院に詣して来馬塚道氏に会ふ。案内せられて伝法院の庭を見、氏の室にて休む。観音に詣し、万愛庵にて夕飯。活動写真を見、十時上野発の汽車にて出発す。」とある。

明治四十四年

三十八 三月六日 東京市小石川区大塚仲町二八 浩々洞ニテ
 暁烏敏様 平信 陸中花巻川口町 宮沢政次郎 封書巻紙
 筆

其後久々御無沙汰申上候

貴師にハ御変りも無く御消光被遊候趣毎々紙上に拝承何よりも喜ハ敷存居候 私も御蔭様に無事に地方道友も異状無之候 只怠慢至極に罪のミ造り候事ハ慙愧之外無之候

毎度御親切に新刊書被下難有奉存候 其都度御礼も不申失礼御海容被下度候

過日年々大沢温泉講習之主催せられ候阿部晃氏来り本年之講習にハ佐々木先生願上度在京学生にて御交渉申上居候処暑中三河御帰省之都合もあり確と御返事もなき故君

等よりモ是非願ひ呉れとの趣旨に有之御承知之通り大沢モ年々引続開催候へ共年々生存競争之強烈に趣く為めか入湯旁々聞法と言ふ程の人モ少なきか年々不振に相成り候様にて折角遠路貴重之時間を御繰合願ヒたる先生方にも御申訳なき年柄モある次第故主催の人々にも規律ある振興策を御警告申上置候 何分主催者も十有年の継続歴史ある会故何とかして振興致し度趣意と存候 町の方モ御承知之通り二三道友之發起にて極めて微力の事にハ候へ共此序を以て御引立被下候御趣意にて御来駕御承諾を被下候へバ幸甚之次第に御座候 何卒貴師より御口添被下御承諾を得候様御取計奉願上候 日数ハ大抵八月中の間御都合被下町と温泉にて十日位の御予定に願上度候 尚本年ハ大御遠忌も有之定て御入洛之御事と奉存候 何日頃に御座候哉 私も何とか都合して東京迄モ参り度ものと存居候

先ハ右久々御無沙汰御詫旁々御願申上度迄 乍末筆御在洞各位様にモ宜敷御鳳声奉願上候

草々

三月六日

宮沢政次郎

暁烏先生

尚此書状を差上候前毎年開催に御手伝得居候伊藤直治氏上野舘郎氏堀田庄二郎氏等にハ相談之上に御座候 宮沢

直治氏ハ申迄もなく兩名にて差上候書状と御見做被下度候

三十九 四月二十六日 東京市小石川区大塚仲町二八 浩々洞

ニテ 暁烏敏様 陸中花巻 宮沢政次郎 葉書 筆

其後御無沙汰御許し被下度候 此度ハ御心血を籠められ候御著書御恵ミ被下無慙之小生モ感謝に辞なく候 何とか初夏中尊師御在洞中御面会御礼モ申述度念願に御座候夏期講師之事も御心配被下感謝之至リニ候 今夏大沢の方ハ第一候補に佐々木先生願上出来ぬ時ハ第二の候補島地大等師に有之趣同幹事之希望ニ有之趣にて万事出来ぬ時ハ又先生を煩ハして願上度しと阿部幹事より至極自分都合のよき申出有之候間寛大の御了簡願上置候 先ハ不取敢御礼迄 乍末筆御健勝のミ是祈候

注1『歎異鈔講話』(明44・4、無我山房刊)を指すと思われる。『日記』『備忘録』欄に、『歎異鈔講話』進呈者として多田鼎以下十五の氏名・寺名の記録があり、沢柳政太郎、姉崎正治らとともに小田島五郎、高橋勘太郎、宮沢政次郎の名が見える。『精神界』に五十五回に亘って連載されたもので、現在に至るまで版を重ねている。

四十 八月六日 加賀国石川郡出城村 明達寺 暁烏敏様 平

信 陸中花巻川口町 宮沢政次郎 封書 巻紙 筆

暑さも相応に強く有之候 師初め皆々様御障りも無く御過し被遊候か 折角御健勝のミ祈居申候

其後余りに御無沙汰申上候事御免被下度候 何時も思ひ乍らの御無沙汰にて殊に当春ハ必ず一度拝顔したく思ひつゝ延引したる次第にて凡夫の予感随分外れ易く御座候此度ハ又御郷里に道の友達を会して賑ハしく讃歎の会有之候由近き処なれば是非にも参り度心躍りせられ候 多田先生も御出席被成候由一入之御事と奉存候 清沢先生の御霊如何に御満足に見給ふらんと奉拝察候

私共の方ハ一日より三日間町に島地大等先生を煩ハし光徳寺に講演の会開き候 大雨の為め聴衆ハ多からざりしも熱心なる師の薫化ハ決して従旁にあらざるを信じ申候又師に前後二回御話しに参り候処貴師や多田師にも関連する御話有之多大の御敬意を以て懐かしく思はれ居らるゝ趣茲に遙に御伝達申上候 温泉の方の会ハ四日より十日迄の処大雨の為め是も聴衆如何と存居候処今阿部氏より報あり第一日男女三十余名列席したる趣に御座候小生ハ参らず昨日賢治を遣ハし申候 年々唯今頃小生の胃腸に変化を来し閉口之至に御座候 併間もなく恢復する事と存居候

又昨日少許の木綿もの郵便に托して送り上候 至て体裁の備らぬ御土産物に候へ共別段差上る殊なるものも未出来不申候節に付御笑納被下候ハ幸甚に御座候

尚多田様にハ貴師より久しき御無沙汰の御詫と御礼意御
伝声被下度候

尚又御相談願上度ハ年々法の会合ハ夏期を以て開かるゝ
習慣と相成り居候処昨今の当地方の有様を見るに年々に
生存に關する方面多忙に相成り日曜制度とてなき地方
にてハ仲々に日中に多数の会合を見ん事ハ実情に立入り
て容易ならぬ困難なるを感じ申候ニ付矢張り仏法の御相
談ハ少々寒く相成りても秋冬の夜か春季を善しとする様
に被存申候間何卒此辺の事情御諒察被下前期の頃に於て
二三ヶ処も連合願上候節ハ洞内諸師之内御繰合被下御
来錫被下候様希望申上置候

八月六日

宮沢生

暁鳥先生

御座下

注1『精神界』第十一卷第六号(明44・6)六十一頁に暁鳥
の名で「修道小集」の案内が載っている。「来る八月十五
日より一週間、生の郷里にて信友の小集を催し度存候、
多田兄、近藤兄、梅原兄、其他の道契も会合して、一週
間法味愛樂の生活をさせて頂き度存候。近国の方にて、
志ある方は御越下され度候。宿所は狭けれど、拙寺の方
にて引受くべく候。」云々。近藤は近藤純悟。梅原は梅原

讓か敵矣か。

四十一 十一月八日 加賀国石川郡出城村北安田 暁鳥敏様

陸中国花巻川口町 宮沢政次郎 封書 巻紙 筆

暁秋の景物坐ろに哀れに候 私の心も外界に連れて同じ
様に思はるゝ事多く候 浄土に近くなる事よく／＼嫌ひ
と見へ申候

久しく御無沙汰申居候処師にハ益々御元氣の御事喜ハ敷
至極に候 私も御蔭様に無事格別之事も無之候 否時折
ハ罰当る筈の私がかく無事にてあるが仕合と思ふ事も有
之候へど多くハ浅ましく足る知らぬ心にのミ蔓られ候
年々に悪い方のミ發達し来る様思はれ我れと情なく思ふ
事も有之候 併立派なる慙愧も起り不申候 折々ハ敵し
き御警醒を賜ハリ候事願上置候

林正因氏も死なれ候 去る四日が其葬儀にて私も参り候
有為の人の死ハ惜しき事に候 不朽之生命を信ぜぬ人に
ハ学問も又せられぬ事と思はれ候 同氏の死ハ臨終確実
に安心に住せられし事と承り何よりも御仕合之事と存居
候

本日百合少々報恩講之御手伝に送り申候(小包の普通便
にて) 年々当地方ニ産地品少なになり形も小に相成る
との事に候 本年ハ形も小さく量も少々に候 御笑留之

程願上候 東京にハ十二月初旬御出の由御同人中にハ余
り御異動無之候哉 東京真大校の廃せられ候^{注1}遺憾之事に
存候
先ハ右近状御報旁々 御光の下益々師の御健康のミ是祈
候

草々

十一月八日

政次郎拝

暁鳥先生

御許に

注1 明治四十四年九月四日、東京真宗大学並に真宗中学を廃止し、新たに京都に設置することを決定。これにより真大は十日で廃校となった。『精神界』第十一巻十号「東京だより」に「清沢先生、月見寛了、師関根仁、兄等の尽誠によりて十年前に東京に移転せられたる真宗大学は、本山の都合にて突然廃校になること、残念に存候。教職員は総て辞し、生徒等は京都に新設せられたる大谷大学に移り候。突然の廃校にも拘らず、南条先生や月見師等の骨折りにて、うるはしき結果を見ることうれしく存候。大谷大学に望む所は、中心より詐る所なき、自覚的信心を獲得する道場となりて、決してく伝習的、職業的布教使の養生所とならざらんことに有之候。」とある。ひきつづいて、十月号の『新仏教』誌上に「真宗大学の頓死を祝す」という一文があったことを紹介、引用している。

浩々洞がブック・メーカーの巢となつて、結局は、一にも本山、二にも本山に過ぎぬではないかと言うのだが、これは明治四十三年始め頃に問題化した、暁鳥(浩々洞)に対する異安心告発騒ぎとその落着にからめての皮肉な評であつた。

真宗大学の廃止、大谷大学の新設には、東京学派側と高倉学派側からみると、内局の学制改革と財政問題とが結びついていた。

補注『精神界』第十二巻第一号(明45・1)「洞日記」の十二月三日(44年)の記事に「帝劇総見をして皆が夜の十一時頃帰った。婆やが「宮沢磯吉さんが来て、婆やは見に行かなかつたのか、こんどから私もお連れなさい」といったらよい……」といへましたよと笑つてゐた。云々とある。また翌二月号の同記事一月三日の所にも、宮沢磯吉の来訪が記されている。

明治四十五年

四十二 四月十二日 東京市小石川区大塚仲町二八 浩々洞御
在洞各位御中 陸中国花巻川口町 宮沢政次郎 葉書 筆

春暖之候御在洞皆様益々御清適御事奉賀上候

陳者小生佐々木月樵師ニ御通信申上度事有之候所御郷里地名未知ニ候テ困リ居候 就テ甚御手数之儀恐縮ニ存候

へ共同師御郷里地名及現今御在住ノ処御知ラセ被下度奉願上候

先ハ右御願申上度迄

草々

四十三 五月十一日 東京市小石川区白山御殿町一〇七^{注1} 浩々

洞 暁鳥敏様 御直 陸中国花巻川口町 宮沢政次郎 封書 巻紙 筆

暫らく御無沙汰を致しました 御変りもなく各地御伝道の事御便りを承ハリ仏天の御冥加と喜び居り申候
私も御蔭様に悪性其まゝ不相応の御恩の中に無事日暮致し居ります

久しく御無沙汰したので何を申上げてよいのかまづ思ひ付くまゝ申し上げましよう

本年も是非一度ハ上京して貴師に御面会もし御教をも得度く思ひつゝ矢張り業薄之悲しさ思ふ様にも参らず只な^(ママ)づかしくのミ思ひ居候

何よりも此頃の私ハ我れながら余りにしぶとく愚痴に候て如何共物之決断に苦しむ事多くかゝる時百雷の頭上に落る如き御手強き御警策にいかで逢ハバやと願ふ事もあり其度び必ず決断ある厳しき知識の念頭に浮ミ申候 何を苦しむと言ふても只愛欲名利等に外ならぬ事に候間是れに淡くなる工夫何卒御教へ賜はり度候 尤モ遠く近く賢聖の遺し置かれし妙薬ハ何程か服せぬにハなき事かと

存候へ共そこがしぶとき頑固の性に候間曾掛りの対症療法御教へ被下度候

本月の精神界難有拝読仕候 貴師の御所感^{注2}いつも情迫る処涙の催さるゝを禁じ能ハず候 旧冬差上候悪文ハ何程か御氣障りと存候処あれハ独り貴師のミならず私も大に残念に思ひ候もの^{注3}に候 そはあの時より二三日前私の元近隣なりし土地の土族の有力者にして志を立てゝ北海に渡り拓地開墾成績宜しく子供ハ皆立身出世し長ハ海軍大佐次ハ農学士工学士女ハ山室軍平夫人等多数の子女ある六十才程の人訪問候時北海談を為し居る内真宗に於ける北海信徒の事やら法主に付て口を極めて痛罵せられしもの私にも残念と思はるゝ程の事にも有之候へ共さりながら真相としてハ捨て難きものも有之又世にハ宗門をかく解釈し居る人の然かも比較的新知識の階級にある事を思ひて仮に魔界の言として投じ置き候次第に候 全く手痛^(ママ)き他山之石に候

総撰^(ママ)挙も迫り候 財政の前途ハ悲観云々 随分心の揉る問題多く候 大多数の人ハ只数十年数年後の心配よりも目前の事にのミ忙殺せられ居る事に候 仲々に余裕なく相見へ申候 地方の在方の人などハ憫れのものに候 悪政治の為め負擔の多くなるを顧慮するよりも目前一杯の酒に権利を売るもの多き様に候 あわれの事^(ママ)に候 世事を離れて宗教もなき事と存候間密接にこの処を結び得る

工夫ハなきものに候哉 年々に迫り来る生活難と宗教と何としても交渉なき訳にハ参らぬ事と存居候 私ハ今人の苦しき多き根本ハ物事を複雑にし虚栄に憧るゝ事時代の甚しき病と存候により少しにしても苦悩を減ずるの方ハ宗教家としても信徒としても出来る丈簡易質素の生活法を取る事実行するより外なき事に存候

御教へを蒙り申度候

先ハ久々御詫旁々余り長く書くも御退屈と存候間後便に譲り申候

五月十一日

草々

宮沢政次郎

暁烏敏先生

侍史

仲々に奥羽□□□□^{注5}に候

当年東北地方へ御出の事ハ無之候哉同上候

注1 明治四五年五月三日に移転。『精神界』五月号には一日の予定として公告してある。

注2 『精神界』第十二巻第五号(明45・5)「精神界」欄「誹謗と讃辞と」のこと。「汝は信を装うて人を誤魔化しつつある也、汝は師を売りて、自己の名利を貪りつゝある也」と言つてよこした友人の一文を機に反省した事柄を記す。讃辞は恩寵のみ光のゆえに來り、誹謗は貢高の心へ

の誠めとしてやって來たのだというように、反省の結果「我は砂糖の如き讃辞の内に苦味を味ひ、落臺の如き誹謗の内に甘味を味はして頂く者也。」とする。

注3 うしろに「投じ置き候」とあるが、『精神界』記事中には該当するような文は見当たらない。たんに投函の意か。ただし、それに当る書簡も残されていない。

注4 佐藤庄五郎をさすか。宮沢清六「兄賢治の生涯」(改稿、昭54・12『現代詩読本12、宮沢賢治』思潮社刊、所収)に、「私共のすぐ後の屋敷には日本救世軍の母とよばれた山室軍平夫人、機恵子(旧姓佐藤)が居られた。この人は照井真臣乳と小学校の首席を争った秀才であったといわれ、後に吉原の多くの娼妓を救出したりもした女丈夫であった。私の祖父と父が「佐藤庄五郎さんと長女のおきえさんの精神は実に見上げたものだ」と口癖のように言っていたものだから、」云々とある。

注5 複写不調のため、四・五字分判読出來ず。

四十四 六月十日 東京市小石川区白山御殿町一〇七 浩々洞

暁烏敏様 陸中国花巻川口町 宮沢政次郎 葉書 ペン

度々御文及過日ハ又結構ナル御著書^{注1}御惠贈被成下難有御礼奉申上候

赤堀女史当地学校ニ奉職ニ付貴意ニ懸ケラレ御仰越被下候処毎日用事ニ追立テラレ未ダ御訪問ノ機会もナク過シ居候 寄寓地ハ伊藤直治兄ノ宿所ニ近ク又寄寓ノ御宅ニ

ハ厚信ノ御老母アル処ト被存候 其内又可申上候
乍末筆御自愛祈上候

注1『人々の死』（明45・4、無我山房刊）か。

大正二年

四十五 三月十二日 加賀国石川郡出城村北安田 暁烏敏様
陸中国花巻川口町 宮沢政次郎 葉書 筆

余寒尚難凌御座候 御変リ無ク御暮し被遊候哉

令聞之御往生^{注1}ヲ悼ミテ新愁未ダ記臆ニ新ナルノ時私モ又

今暁五時永々病氣療養中ノ母ヲ失ヒ申候^{注2} 平素不心得ノ
者モ何トナク悲シク候

右一寸貴師迄御報申上候

注1暁烏の妻房子（佐々木月樵の妹）、二月二十一日死去。前
年九月二十日より病床にあった。風邪から結核に転じた
もので、発病後暁烏はずっと加賀に在って看病した。
折々『精神界』にもその記事が見られるが、第十三巻第
一号（大2・1）には、隣村の寺の報恩講の帰り、病む
妻の待つ家に戻るまでの不安を記した詩「時雨るゝ野
道」が載せられ、二月号には「加賀だより」で、「道友諸
兄弟、お許し下さい、私は一人の女を看護するが為に、
常に皆さんに御無沙汰にはかりなつてをる。」等と詫び

ている。また、三月号には講話「瀕死の病人の背を擦で
つゝ」があり、没後の四月号には、一月以来臨終、葬儀
の日まで、死にゆく人との会話、具体的な有様をつぶさ
に記した「妻の死」が発表されている。

注2喜助の妻キン（嘉永四一八五一、四、九生）。

四十六 三月二十一日 加賀国石川郡出城村北安田 明達寺
暁烏敏様 御直 陸中国花巻川口町 宮沢政次郎 封書
巻紙 筆

日増暖かに相成申候

貴師にも御恙なく御起居被遊候御事と奉存候

過日は又御心安立に母死去の事申上候処早速御紙面に御
心に懸らせ候被下物到来仏前に供へ申候 難有拝受仕候
一昨日漸く忌明仕候に付不取敢御礼迄申上度候
又過日之御紙面にて今春^{注1}

〔途中巻紙貼り合せ部分欠。〕

趣何卒御確定被下候ハゞ下地のミならず盛岡浄法寺方へ
も御伝へ置奉願上候
先ハ右御礼旁申上候

三月二十一日

草々

宮沢政次郎

暁烏先生

御座下

注1 欠落部、長さも不明だが、『精神界』第十三巻第五号(大2・5)「東京だより」に、「堤鳳麟兄は、其山形市七日町の唯法寺において、去る二十三日より、宗祖の御遠忌を営まれました。井上豊忠、福田見昌、山辺習学、秋月徳水、土屋秋円の諸氏が集まりました筈。暁鳥も之れに加はりました。」とあるので、この予定のことが話題とされていたように見える。暁鳥は四月十七日から五月十二日にかけて、越後東北を旅したのである。横戸、越前浜、新潟から一旦浩浩洞に寄り、山形、尾花沢、楯岡、福島、仙台を巡り、花巻では安浄寺、盛岡を経て浄法寺では小田島方に滞在して帰洞した。

四十七 五月十五日 東京市小石川区白山御殿町一〇七 暁鳥
敏様 陸中花巻川口町 宮沢政次郎 葉書 筆

其後御伺モ不申居候
御変り無く御帰京被遊候哉

御風邪氣と承り御案じ申居候 小生停車場に御見送可申
処其日店の若者病なくして寝たるまゝ死去致し居種々取
紛れ今に手不足困り居候 今更ながら無常の世相と存候
先ハ御伺迄

四十八 十一月九日 加賀国石川郡出城村北安田 暁鳥敏様
陸中花巻川口町 宮沢政次郎 葉書 ペン

日増寒く相成候 貴師御変もありませぬか 毎度頂き物
御挨拶も申さぬ事御詫申候
本日此便と共に小包に土産の百合送り上候 産物の村も
地に厭きが来たものか毎年小さくなると申して居ります
ほんの少し斗り奥様の御命日にでも御遣い下さる様に
又御北堂様の御力落しなく益々御壮健の事念じ上申候
此地に於ても幸に私共無事御恩の日暮らし仕居候 さり
ながら御同行に力ある念仏者の出て下さる事遺憾に存
候 何卒末長く御引立願上候
先ハ御無沙汰御挨拶旁々申候

大正三年

四十九 五月二十日 加賀国石川郡出城村北安田 明達寺 暁
鳥敏様 親展 陸中国花巻川口町 宮沢政次郎 封書 卷
紙 筆

十八日発の御手紙いつも御信切(ママ)の御文面有かたく拝見い
たしました 折々雑誌やら御紙面やら頂いても一向御無
沙汰斗りいたし誠ニ相済ませぬ 弱い身の情報御尋ね
被下貴師の千里眼に映じたる事と敬服と共に御礼申上ま
す

先月の央頃賢治中学を出てから鼻の工合あしき処あり手
術の要ありとて精々十日位の予定にて私付いて参り手術

を受け候処二三日経過ハさ程の事もなかりしに次第に高熱に上りチブス類似のものと相成り三十余日の入院加養に漸々ニ生命取留め二三日前漸く帰宅致候

私も介抱中より少々工合悪しく思ひ候内二十日程前より腹部に方三寸程の腫れ物出来身動きも出来ず痛ミもありて困り候処漸く痛ミ丈ハ取れ腫れ依然有之候へとも少々快く相成り候

今年ハ何方も病難の多き年柄に思ハれ候 私近処にても随分病人や死人多く候 先づ命を取止めた方の病人ハ善き方と思ひ居候

御存じにてあらん盛岡滞留中高橋勘太郎氏の長子十六才なる男子入学にとて盛岡偶然の病にて死なれ候 私ハ偶然御法事に連り同氏夫妻の悲しミを分ち申候 其他佐々木哲郎氏にハ一寸逢ひ申候 当地御尋ねの人々には当年ハ幸ひに障り無之候

六月初め御上京との御事小生も四月頃参り度予定にて居り候処此模様にてハ如何か相成り候ならん 兎に角病ハ苦しきものに思ひ候 何程御恩と思ひても苦しい時ハ何にも出来ませぬ 只当面の処が楽になりたい外ありません 併し貴師の唯我独尊の御念^注仏とハ御言ハ初めての熟語と承り候へと味ひハ矢張同様に味ひ居り候かと喜バ敷存候 其訳ハ仕様のない嬌慢な手の付けられぬ泥凡夫の私が狂ひもせ

ずに此苦悩多き世に悲悩を抱きながらも生存を続けて居るのハ此御力加ハらでハ到底出来る事でハありませぬ たしかに百千万人中の仕合せ物なりと云ふ感に生きて居るに違ひありませぬ

長々の御詫旁々御礼迄申上ます 末筆ながら貴師及御母堂様の御健勝偏に祈上参らせ候

五月二十日夕

愚弟

金蓮拝

非無先生

御座下

注1妻の死後、暁鳥の信仰にまた動きが見られた。早くは『精神界』第十三卷第九号「精神界」欄に「一人の宗教」を載せたあたりに見られるが、十一月号の「移され行く生活の気分」を経て、新年、大正三年に入って第十四卷第二号の「信仰の流動味」、「胎内くぐりを出でて」、第三号「新を追ふ心」などで蘇生した生命にあふれる新主観の表明に結び、やがて第六号の「四月から五月にかけての自分」に至るのである。ここで暁鳥は「畢竟私は私より外にどうもなれぬ奴であるとわかりました。信念も、道徳も、生活も、思想も、絶対の私一人のものでなければ、生命ある私が死地につかねばなりません。私はいづれの概念的な生活にもはまることできないで、自分の生命の発するまゝに突進するやうになりました。私は私自身の

生活をやります、伝習や概念の生活の獄舎を破ぶつて、赤裸々の私が生れ出しました。信念も思想も、道德も、私一人のものであります。如来と云ふも、念仏といふも、私一人のものであります。信念にも、道德にも、思想にも、束縛せられずして、解放せられたる絶対の第一人として私がたつことができるやうになつて、こゝに始めて、自分は親鸞である、自分は法蔵菩薩であると、名乗ることができます。浄土真宗は私一人の宗教であります。仏教は私一人の仏教であります。「かくて私は、釈尊誕生の偈、天上天下、唯我独尊の叫びは、私自身の誕生の第一声であつたと思ひます。さうして私は、今日称へます念仏に、この「ホヤ」といふ誕生のうぶ声の表現を味うてをるのであります。／天上天下、唯我独尊は、近代人の心のゆく方江であります。さうして、伝習と教訓と虚飾とを取り去つた万人の赤裸々の中心の要求であり、本願であり、信念であります。これが南無阿弥陀仏であります。」といった素直な信念を表白している。

五十 十月二十一日 東京市北豊島郡巢鴨町一ノ十四^{注1} 曉鳥敏

様 陸中花巻川口町 宮沢政次郎 葉書 筆(本文はペン)

久しく御無沙汰申上居候 毎度御文書御恵与被下難有御礼申上候 貴師御変りもなく転法輪の御励み感謝の至りに候 過日ハ七年振りに多田師に逢ひ種々御近状も承^{注2}はり申候 其際愚生駄頭に師を送りて希望を申し候 目下心

霊界の動揺不安ハ梅雨頃の低気圧以上人心に浸潤する甚敷何時晴空を仰ぐとも知れぬ事なれば雷の如き直截を以て特色とせらるゝ貴師と電の如く何程細密迂余曲折にも通徹する貴師(多田師)とハ兄弟一致此不穩の空合を一掃して下さる任務ある事を御希望申上置候 段々寒くも相成候 何卒御自愛被遊候事切望の至りに候 先ハ
御名の下に御礼旁申上候 草々

注1 浩々洞は前年、大正二年十月十六日に小石川区指ヶ谷町八九に移転し、三年八月十六日にここに移転した。

注2 多田鼎は十月四日夜東北にむかい、十四日朝帰京。『精神界』第十四卷第十一号「書斎小観」欄に自ら詳しく報告している。「盛岡では、六日町の高橋伊兵衛氏の家にとめてもらひました。氏及び令室と四人の令嬢と令息との恩遇の中に、二夜を、此処で過ごしました。千原円空氏を始め、林氏や松見氏や、赤沢、工藤、池野、四戸、小野、盛田の諸氏を見て、又花巻の宮沢氏や、黒沢尻の中野目、齊藤の二氏を見て、喜びを感じました。」「十日の朝、赤沢家を訪ひ、皆さんに送られて、花巻に移りました。花巻には七八年の間参りませなんだが、宮沢、伊藤、梅津、箱崎、阿部の諸兄姉を、前と同じやうに見ることができ、又赤堀姉にもあうて喜びました。茲では中島屋でとめてもらひました。」「十日の夜は明円寺にて、翌日の午後は、花陵会館にて、其夜は中島屋の客室にて、諸兄姉と語りました。其間に石鳥谷、更木の間の方々にもあひまし

た。高橋勘太郎氏は、此処まで来て、十一日の夜、深更に別を告げられました。」「十二日の朝、花巻を出て、次の駅の黒沢尻で、車を下りました。」

なお同じ「書斎小観」の後ろの部分に、「千葉に帰ってから、」「二十二日には、宮沢磯吉兄が、京阪の旅行をへて、花巻に帰る途中、立寄ってくれました。」ともある。

補注野本『暁鳥敏伝』の「波紋」の章には、大正三年頃の浩浩

洞の動揺が語られている。「救済を仰ぎ、往生を重んずる多田鼎と、純乎たる主観展開に生きて行こうとする新洞人達との間には大河の隔りがあつて相容れなかつた。」

出発点や出身校なども違い、「木場了本などは、暁鳥の生活態度とその更生した考え方が一切許せなくなっていた。」「この頃の『精神界』は編集だけを浩浩洞でし、出版、発送、販売を無我山房がやっていた。新傾向の『精神界』は段々評判が悪く、売行きがはたと落ちた。」その始末のことなどが紹介され、「内側のぐらつき、それは『精神界』誌上に明らかに出来た。」として、それを示すエピソードに、「宮沢賢治の父政次郎は八月号を見てのあと／近頃の『精神界』はどういうものか、気分が大層違ふ様に思はれます。森厳なる『精神界』の題号には少しく相応せぬ様の事もある様に思はれます。(私信)」と引用してある。この書簡は、紛れたものらしく、現在見当らない。

浩浩洞のまとまりが悪くなり、『精神界』や出版物の売行

きも悪くなってその善後策を講じつつあった頃、京都で発行されていた『中外日報』が、大正四年一月二十九日、二月五日、九日とたてつづけに暁鳥の醜聞記事を書いた。それらを機に暁鳥は帰郷を決意し、暁鳥、佐々木、多田を中心にした浩浩洞は、実質的な解散を迎えるわけである。醜聞をめぐる出来事からの暁鳥の再生と、『中外日報』社主真溪溪涙骨との交りについては、ひきつづく「誕生」「不惑の年」の章に詳しい。

浩浩洞、『精神界』は、廃絶を惜しんだ関根仁応、月見寛了の世話で金子大栄が引きつぐこととなった。暁鳥の手で編集したのは大正四年一月(第十五卷第一号)までであったが、編集人兼発行人暁鳥敏の名は三月号まで残された。浩浩洞内精神界発行所として、編集兼発行人金子大栄で刊行したのは、第十七卷第一号(大6・1)までであり、そののち、編輯人曾我量深で途切れ勝ちに刊行を続けた。第二十卷第二号(大8・2)まで確認できる。

大正五年

五十一 八月三十日 加賀国石川郡出城村北安田 暁鳥敏様

要旨 陸中国花巻川口町 宮沢政次郎 封書 巻紙 筆

酷暑之处御障りも無く御過し被遊候由何よりも喜ハ敷存候

何時も存じ乍らの御無沙汰御申訳も無き次第二候

段々一ツ／＼年を繰るに連れて済まぬ事や煮え切れぬ事の多く成り候事何としても私共にハ娑婆寂光土と思ふ事ハ望ミなく存候 儲高橋勘太郎兄過日参られ候に付其ついで御相談仕り候 当年ハ是非御宿約もある事故御来遊を願上る事 季ハ矢張十月頃又ハ以后が宜しかるべしと申合せ候

日時の外ハ御都合にて御取極め願候て宜敷候 何卒右宜敷御承諾奉願上候 久々にて沈滞を掃ひ申度と楽ミ居り候間御差繰日時御指定被下度候

先ハ久々御無沙汰御詫旁々御願迄 尚残暑厳敷候 御自愛專一に祈上候

八月三十日

草々

政次郎

非無先生

御座下

大正六年

五十二 大正六年元旦 加賀国石川郡出城村北安田 暁鳥敏様

陸中国花巻 宮沢政次郎 葉書 筆

謹賀新年

累年之御厚誼奉深謝候

益々御健勝之程是祈候

大正六年元旦

五十三 五月六日(消印による) 盛岡市六日町二十四 高橋伊

兵衛様方^{注1} 暁鳥敏先生^{注2} 岩手県花巻川口町 宮沢政次郎

葉書 筆

御壮健ニテ御来盛之趣喜上候

日程ノ事ハ先般高橋勘太郎氏ヨリ十二日ヲ一日繰下ゲ十三日ニ確定御来花下サル様御申通ジニ付右十三日ノ夜ヨリ十五日ニ掛ケテ約三席程ノ日程ヲ拵ヘ阿部君印刷ヲ頼ミタル筈ニ候 併シ未ダ余日モアルヲ故御変更トアレバ確定ノ処御来花ノ時間迄重テ被仰下度奉願上候

注1 藤原鉄乗、高光大船らが発行していた雑誌『旅人』に暁

鳥敏を加えて改題、四六倍判八頁の『汎濫』を大正六年

一月に創刊した(月二回、金沢市の愚禿社より発行)。そ

の『汎濫』五月五日号に「盛岡にて」として「大宮廻り、

殆んど二十九時間を費して五日の夜更けて、盛岡につき

ました。十五年前に始めてこゝに來た時の事など思ひ出

されました、六日には劇場で盛な花祭りがあつた。講演

を要せぬほどの群衆。よろこびのさわぎに、私はほんの

十分間ばかりお話をして。余興の少女の桃太郎の歌劇に

涙を吞みました。私は楽しい一日を得たのでありまし

た。雨がふりました。今日は高等農林学校に行き、夜は

物産館で講話をします。桜はまだ散らぬので再び春に会

ふた心地がします。お大事に。／五月七日 盛岡にて
敏」というたよりがある。

注2住所氏名はゴム印である。以下大正六年の内は全て同じ。

五十四 五月八日 盛岡市六日町二四 高橋伊兵衛様方 暁鳥

敏様 至急 岩手県花巻川口町 宮沢政次郎 封書 巻紙
別刷一枚添え

尚高橋氏ニ御面会之節ハ宜敷御伝声奉願上候

益々御健勝御事喜上候

先般来高橋氏ヨリ御示シノ日時ニヨリ別紙之通り時間割
阿部氏ニ於テ拵ヘ置キ印刷モ出来居リ都合ニ候ヘ共昨来
ノ御来示ニ従ヒ左ノ通り仕置候間御承知被下度候

十四日午後六時六分着ニテ

当地ニ下車可被下事

十五日 御滞在

十六日午後六時六分発ニテ

黒沢尻ニ御出向ノ事

右ノ範圍ニテ二席カ三席ノ御話シヲ願フ事ト致シ黒沢尻
ノ方ヘも宮沢直治氏ヨリ其趣通知致シ広告モ拵ヘ直シ可
致予定ニ候間御了承被遊度願上候
先ハ右御返事旁重テ申上候

草々

五月八日

宮沢政次郎

暁鳥先生

御座下

尚時下他ヘノ旅行者及不在者等沢山有之迂生ノ如キ出動
ニ都合ノ宜シカラヌ者ノミ残り居ル丁故ホンノ少人数ニ
御話シ可被下覚召ニテ願上候

〔別紙広告ビラ〕

暁鳥敏師来る

五月十三日午後七時半より

一仏教演説 光徳寺に於て

五月十四日午前九時より

一信仰座談 中島屋支店に於て

五月十四日午後二時より

一婦人法話 中島屋支店に於て

右御通告申上候謹言

大正六年五月

仏教四恩会

右ヲ十四日夜ヨリ十六日午后迄ノ日時ニ相談ノ上訂正取
極可申候^{注1}

注1この折曉鳥は二十八日に帰郷するまで、盛岡、福岡、浄

法寺、花巻、黒沢尻、盛岡、東京と巡った。『汎濫』大正六年六月二十日号に「東京にて」と題して、五月二十一日付の便りが載っている。その中に「私は九日に盛岡をたちて福岡町に至り二泊しました、講演会が開かれました。山吹の花の咲いてをるのに珍らしく雪がふつたのでとう／＼一日余計に逗留することになり十一日に荷馬車に乗り五里の山路を浄法寺村にまゐりました。」(小田島家逗留)「高橋勘太郎さんは不相変熱心に法を求めて、進展してゐられます。校長孤舟さん等福德会婦人会など開かれ「維摩経」仏道品について語りました。十三日には小田島五郎さんが催さるゝ第九回目の少年少女の花祭がありました。楽しい会でした。」十四日には花巻にまゐりました。宮沢政次郎、同直治、斉藤宗次郎氏等の旧知の人々に四年ぶりで逢ふたのはうれしかった。十六日には玄〔志〕の〔戸〕平の温泉に終日遊びました。十六日の夜は黒沢尻町にまゐり、始めて洗心会にて諸子に逢ふたのですが一見旧知のやうでうれしかった。などとある。また、大正九年『日記』に「花巻下車。政次郎、直次、梅津等の諸氏に逢ふ。夜小学校で講話、阿部兆〔晃〕氏等と話す。宿は中島旅館支店」(7・25)「花巻第二日。政次郎、直治、梅津、阿部四氏と大沢温泉に遊ぶ。夜、電気会社にて婦人会を開く。深更一時に花巻をたつ。」(7・26)などとある。

五十五

五月三十一日 加賀国石川郡出城村北安田 明達寺

曉鳥敏様 岩手県花巻川口町 宮沢政次郎 封書 巻紙

〔前略〕^{注1}

日夕御音容を偲ひます

今又諸兄姉と共に師によりて与へられたる波動を味ひて居ます

大正の鸞上人幸ひに加餐自重如何なる外界の圧迫にも御忍耐あらん事を祈る

以上

五月尽日

寒石

悦浄

金蓮

曉鳥老師

〔下略〕

注1三名連名の手紙。省略部分を次に示す。「宮沢兄の引力に牽かれ昨夕当地へ参りました。師の描かれた蛇に足かつきますよと中庭の楓は古い袖をひるかへして笑ふて居ました」(寒石)「小生も宮沢兄ニ参り御来花の御物語うわさ申して喜んで居ました志戸平温泉の御供は忘れられません」(悦浄)

また追伸部分は高橋勘太郎寒石の筆で次の通り。「浄法寺では小田島まささんが生きた嘆異抄を拝聴したと喜んで居られます／＼家内は曉鳥様日蓮上人になつたといふて私にかくして多田さんに長い手紙をかいてやツた

らしい／孤舟紫□□兄は何度も訪ふてきて喜んでました／昨日盛岡に池野兄と快談し十一や兄夫婦と談じ工藤兄を訪ひ赤沢兄の困つたやうな只をながめ鎌田兄の喜びを聞き乍婦人会員連四五の相思の惑ひを解き緑葉の踊る中を突進して当地へ参りました／矢張家庭には罪人です」

五十六 九月一日 ^{注1} 加賀国石川郡出城村北安田 暁烏敏様 岩

手県花巻川口町 宮沢政次郎 葉書 筆

暑気尚凌ギ難ク候処益々御健勝之由奉賀上候

過日ハ子供等ニ被下候御紙面在中之御手紙拝受仕り候

種々御手数之段難有御礼申上候

尚是より疫病之季節ニ向ヒ候 愈々御自愛專一ニ願上

候 草々

^{注1} 消印年号は不鮮明だが、六年と推定。

五十七 十月十二日〔消印による〕 加賀国石川郡出城村北安田

暁烏敏様 岩手県花巻川口町 宮沢政次郎 葉書 筆

久敷御無沙汰申居候 昨今ノ氣候ニ御障リ等モ無之候哉

私共御庇様ニ無事過シ居候

過日ハ藤原氏御尋被下候趣之処途中より御引返シニ相成リ候趣心残リニ存居候 風水害ハ貴地さ程ノ事モ無之候

哉 関東地方ハ仲々ノ痛手ニ御座候 ^{注1} 何カ障リ多キ世ノ中ニ候 安住処一大事ト存候 先ハ御無沙汰御詫旁申上候 草々 尚雜誌度々難有奉存候 ^{注2}

^{注1} 九月三十日から十月一日にかけて東京を中心に東日本に大暴風雨、被害甚大であった。

^{注2} 『汎濫』をさすであろう。なお、暁烏は大正九年九月に「古い教団を呪はしく思うてゐる私は、できからうとする新しい教団も呪はしくなり、親しい友と手を別つの悲しみを思ひつゝ、『汎濫』同人の中から逃れて独り静かに、自分の仕事に精進することに決心しました。」（九月二十日号）と言って『汎濫』同人を脱退した。

五十八 十二月十一日 加賀国石川郡出城村北安田 暁烏敏様

至急 岩手県花巻川口町 宮沢政次郎 封書 巻紙 筆

段々寒サニ相成リ候処何モ御変リモ無之候哉

此方モ御庇様ニ皆無事ニ候

毎度汎濫御送付頂キ難有奉存候 別紙小為替券ノ内壱円

ハ梅津氏ヨリ御送付申シテ呉レト云フテ相届キ候ニ付小

生分モ壱円相加ヘテ御送付申上候次第ニ候間何卒右誌代

ニ御入レ置被下度奉願上候

先月ハ又藤原氏御来遊被下拝顔致候 仲々鋭キ人ト御見

受致候 小生ニ対シテハ今度逢ヒタル中ノ一番悪キ人間

ナリトノ難有讃辞ヲ賜ハリ身ニ余ル光荣ト存候

小生等モ真実ノ日暮ラシ致度ト考ヘ候ヘ共衣食ヲ要スル身ニハ其真実ヲ言行ニ出スノ容易ナラザルヲ感ジ居リ候貴師ニモツマラヌ迫害ハ受ケラレヌ様ニト折角念居候

先日高橋勘太郎氏ニ御逢ヒ致候 矢張真実ノ出来ヌ事ヲ申シテ居ラレ候

草々

十二月十一日

宮沢政次郎

暁鳥様

侍史

大正七年

五十九 四月九日 加賀国石川郡出城村北安田 明達寺ニテ

暁鳥敏様 要用 陸中国花巻川口町 宮沢政次郎

長イ寒サモ漸ク明ケテ春ラシクナリマシタ 先達テ中御加減ガ悪カツタ様ニ汎濫デ拝見シマシタ処直グ御快癒トノ丁何ヨリモ喜バシク存ジマス 御母様奥様モ御揃ヒニ御健勝トノ御事ハ尚更結構ニ存ジマス^{注1}

近頃ハサッパリ御無沙汰イタシマシタ 御詫ヲ申上マス 当年ハ此地方ヘ御出ノ丁ハアリマセヌカ 御伺ヒ申シマス 世ノ中ノ近状ニ付テ何カ御感想ハアリマセヌカ 今

ソノ事デ勘太郎様ニモ久シ振リニ手紙ヲ書キマシタ 先達テノ中ノ誠意ナキ出兵説^{注2}ノ立消ニナリタル丁ハ国民ノ大多数ニ取り誠ニ結構ノ丁ト存ジマス 併シ当路ニモ如何ハシキ野心家ノ居リタリ又国民ノ一部ニモ輕佻浮薄ノ論議者モアル丁故此上トモ油断ハ出来マセヌ 御互ヒ国民トシテ一人タリトモ善ク注意シテ過失ニ陥ラヌ様致シ度イト思ヒマス コノ曠古ノ時局ニ当リテ東西トモ教界ニ獅子吼スル人ノ乏シイ丁ハ何タル寂シイ丁デアリマシヨウ 一日モ早くコノ惡夢ヲ醒マス大人格者ノ出現ヲ祈リマス

中外紙ニ梅所ト云う人が貴師等ノ御仕事ト聞ク親鸞上人ノ主義ヲ欧文ニ書イテ宣伝スルト云フ丁ヲ一寸冷カシタ様ナ丁ヲ書イテ見ヘマス 世ノ中ハ何ト云フテモ善惡ニ付ケテウルサイモノト思ヒマス

ソレニ就テモ踟躕^{ママ}〔躊〕ナク所信ヲ実行スル丁ノ出来ル人ハエライト思ヒマス ドーカ御序ニデモ近キ御感想ヲ御知ラセ下サイ 今日ハ久々振リニ御無沙汰ノ詫旁書キマシタ

時節柄一層御自愛專一ニ祈上マス

四月九日朝

政次郎

暁鳥先生

御座下

注1『汎濫』大正七年四月二十日号「北安田たより」に「私の病氣はすっかりよくなりました。その代り母が毎日腹痛になやんでゐます。」「二十日ばかり病氣と御用の多忙で諸方の方々に御手紙のお返事を怠つてゐます。これからやゝ手すきになりますからぼち／＼お返事を出します。どうぞお許し下さい。」などある。

注2大正六年のロシア十月革命に対して日英米などの連合軍による干渉のための出兵。本格的には七年七月「チェコ軍救援」を名目に、八月二日、日本政府はシベリア出兵を宣言。これを機に国内では米騒動が引き起こされることにもなった。

ここでは、七年一月十二日に、居留民保護を理由に、ウラジオストクに軍艦を派遣したことや、二月に本野外相が米大使に東部シベリア鉄道管理を提議したのに対して三月に入つて不同意の回答があつたことなどを指すか。実際には、四月五日に日英陸戦隊のウラジオストク上陸が開始されている。

暁烏は『汎濫』大正七年七月十五日号で、米国大統領ウィルソンの演説を読んで共感する所のあつたことを語り、次のようなことを記している。「私は今日の我國の人達が小さな国家主義や民族主義に籠城して、征服主義と侵略主義に捕へられて居るのをあき足らず思ひます。この身体があり、この家があり、この村があり、町があるやうに、国もあり民族もあります。然しながら、この世界

は一民族の、一国家の、一個人のものではなくて、もつと広い／＼壇^{「ママ」}〔垣〕のとれた広い世界であることを忘れてはなりません。私は国家や民族を否定する者ではない、然しながら自分の国家、自分の民族以外の他を征服せねばおかぬといふ思想には讀^{「ママ」}することができません。私はどこまでも、超民族、超国家、超個人の、広いうちとけた唯一の世界、人類一致の世界を建造せねばならぬと思ひます。私は個人の上に物質的利己主義を嫌ふやうに、国家や民族の上にもこの物質的利己主義のあることをいやに思ひます。私は十方衆生の心を心とせねばなりません。万人の自由を尊重して万人の個性を尊重し、こゝ唯一人の個性の瀾満した、唯一の生命の国を発見せねばなりません。これが私の生活であり、宗教であります。」「また、八月十六日号でも繰り返し述べている。日本が利己的國民の結晶体として「利己的挙動をたくましくして居る」のではないかと心配になるとして、「先日ロシアからかへつた人にきゝますと、彼のセミヨノフ軍の中には多くの日本人があり、その武器及軍費は日本の或る方面から支給されて居るといふことをきいて、怪しからぬことゝ思ひます、若し我國が、連合国の条約を破棄して単独講話をしたレニン一派の露国政府を、背信者として攻撃しやうと云ふならば、堂々として国を挙げて彼等に迫るがいゝではないか、それに一面彼等の革命を認めて居りながら、一面に彼等の反対者をも認めて居るものゝやうなことをやつて居るのを見ると、私はその不誠実なることに驚かずには居られませぬ、支那に対してき

たと同じやうな政策をロシアに対して用ひて居る様です、私は国際間に於けるマキャベリズムを恐れ且つ賤しみます、たと誠意ある日本国は誠意ある行動を取つて貰ひたいと思います。」「比頃のシベリアの出兵問題はどうか、東京辺の政治家の云分を聞きますと、出兵論者も、非出兵論者も、共にその申分がけちくさい。いや今出兵するのが日本の利益だとか、いや今出兵せんのが日本の利益だとか、出兵の理由も、非出兵の理由も、「日本の利益」「それ丈しか見えないのぢやないですか、」「私はシベリア出兵論者であります、」「同朋の血と、汗とを集めたる、真面目なる出兵がなくてはならぬことと思ひます。それは単にシベリア占領のためでも友人、チェック擁護の爲でもなく、過激の政府とこざり合をやつてゐるセミヨーフ軍を援ける爲でもなく、シベリア鉄道保護の爲でもなく、彼の亜米利加が百万の軍を西部戦線に送つたやうな感慨を以て、我日本国は、露国のレニン政府を助けて東部戦線に独逸と真剣の戦をやらねばならぬ、」「私は日本の上下が心を一にして、世界の平和の爲の大戦争に全力を注いで突進することを望みます、戦は真面目であつて欲しい、真面目に平和を欲する者は、真面目に戦ひます、」

なお、暁鳥の思想はこの前後大きく進展するが、『汎濫』大正八年九月二十四日号の「改造はどこから初まるか」や大正九年一月十五日号の「前進者」などが注目される。

補注『汎濫』大正七年二月二十日号「北安田たより」の中に

「『汎濫』は千五百部刷ります。千部は社から四百五十部は私から分ちます。私からは知人に分つのが多いのです。社から送るのも金の来ぬのが随分多いのです。私の方の発送日には母から下男に至るまで総かゝりて、折つたり糊つけをやつたり切手をはつたりします。十七年前に『精神界』を出した当時の光景を思ひ出してゐます。」とある。

補注大正九年七月十三日から八月一日にかけて暁鳥は、黒沢尻、盛岡、一戸、福岡、浄法寺、花巻、会津若松、東山温泉、と東北を巡つた。『汎濫』大正九年八月十五日号「北安田たより」にその折の記事がある。二十五日「午後花巻に入つた、金沢政次郎氏等と会ふ、阿部兆氏等の発起で、夜小学校で講話をした。二十六日には二三の友と大沢温泉に遊んだ、十五年ばかり前にこゝに十日間講習をして『難異鈔』を講じたことなど思ひ出した。その折に親達と共に来て話のあとになると私の側に来て遊んでゐた子供が、女は女子大学を、男は高等専門学校を卒業してゐるのを見て、自分も大分年をとつたのだなと思ふた。／二十八日早朝、花巻をたつた。」

昭和二年

六十 七月二十三日 石川県石川郡出城村北安田 明達寺 暁

鳥敏様 岩手県花巻川口町 宮沢政次郎 葉書 筆

志願倦むことなく遂に欧州を巡りて御無事御帰国之由何^{注1}よりの御喜びと存候 定めし母上在さ^{注2}バとの御感想一杯と存候 ゆる／＼御草臥休めの上御土産話伺度候
先ハ

注1 大正十五年十二月五日門司を出帆してインド仏蹟巡拝の旅に上り、ひきつづきヨーロッパを巡って昭和二年七月九日に下関に帰着。

注2 母千代野は大正十三年一月二十九日死去。

昭和三年

六十一 八月十二日 加賀国石川郡出城村北安田 暁烏敏様

岩手県花巻川口町 宮沢政次郎 電話二〇八番^{注1} 封書

巻紙 筆

願慧^{注2}によりて御消息拝見御健勝何よりと喜入申候

当夏ハ懸違ひ拝顔を得ず遺憾ニ存候^{注3} 又遠方へ御出懸の御模様偏ニ御健康を祈上候

北海道でハ政治批判をなされて警察の注意人物になられたとの御事昨今の政情全く御同感ニ候 我国人の不真面目が今頃田中^{注4}氏の如き男に政治を托せねばならぬ様なりし事痛ましき事ニ存候 政治家を真面目にする事ハ真面目なる国民教育の外なき事を思へバ尚一層の御健在を祈

り申候

東西の空にハ何となく妖雲の漲る様覚へられ誠ニ憂慮に堪へぬ次第に候 何とか国境を超えて仏心の融和出来ぬものかと存候 同時ニ御互ニ貪瞋の業力の恐るべきに戦く次第ニ候

夏期御講話に御多忙の御事と存候 御不沙汰御申訳旁々暑中御伺迄申上候

八月十二日

勿々

暁烏敏様

宮沢政次郎

侍史

注1 住所・氏名・電話はゴム印。

注2 『願慧』、大正十一年一月に創刊した個人雑誌『薬王樹』を大正十四年一月より改題発行したもの。

注3 六月十四日から七月一日にかけて富山、秋田、岩手、青森地方を巡ったが、花巻には降り立たなかった。ひきつづき七月二十日にかけて北海道、更に三十一日まで樺太を旅した。

注4 前年昭和二年四月発足の田中義一内閣をさす。

補注 大正九年以後、暁烏が花巻を訪れた年月を挙げておく。
大正十三年七月、大正十五年七月、昭和二年九月、昭和五年七月、昭和七年九月、昭和九年五月、昭和十八年六月、昭和二十三年九月。